

Title	古代印度及び錫崙の塔婆
Sub Title	
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.1 (1941. 7) ,p.119- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代印度及び錫崙の塔婆

佐原六郎

一、舍利八塔と阿育王塔

印度では極めて古くから火葬が行はれて居た。

玄奘三藏は印度に於ける死屍處分法に關して、「終を送り殯葬することにつきてはその儀に三あり。一に曰く火葬なり。薪を積みて焚燎す。二に曰く水葬なり。流に沈めて漂散せしむ。三に曰く野葬なり。林に棄てゝ獸に飼はしむるなり」（國譯一切經、史傳部十六、大唐西域記、卷第二、三二頁）と傳へて居る。玄奘の印度への巡歷は第七世紀のことであり、然もそれよりは遙に古き昔に行はれて居たらうと思はれる土葬に就いて彼は何の記述も残さなかつ

頃であつたらうと推定されて居る。從てインド・アーリア人が火葬を行ふやうになつたのもその頃からであり、然もそれは衛生上の見地から爲されたのだらうと考へられて居る。

水葬や野葬の場合に墳墓の必要なきは云ふまでもないが、土葬及び火葬の場合には死屍又は荼毘に附せられた骨灰を埋葬し且つその場處を標識すべき塚を築く必要が生じた筈である。殊に貴人や偉人の墳墓としては比較的に大きな塚の建てられたらう事も當然推測せられる。印度の佛塔たるスツーパはこれら塚の發展建築化したものと見らるべき、然もそれは佛教以前既に相當に發達して居たものと考へられる。從てハーヴェルも次の如く述べたのである。「スツーパは阿育王の熱心なる佛教宣布に依て著しく發達せしめられ且つ弘く各地に築造されるに至つたけれども、然もスツーパそのものは佛教に端を發したものでもなけれ

ば、又インドアーリア宗教思想中の佛教的方面のみ連關して起つたものでもなかつた。阿育王時代には耆那教徒も亦他の教派のものも夫々スツーパを持つて居た。(中略) 然も最古のスツーパは宗教的禮拜の場處だつたのではなく、未だ火葬の風なく、土葬の行はれてゐた時代に死屍を埋葬した場處を紀念するために建てられたものであつた」と(ハーヴェル、前掲、四六頁以下)。

然らば佛教以前のスツーパは如何なる形式のものであつたらうか。これに就いては從來種々の想像が行はれて居るけれども何れも臆測たるに止まつて確實なる證據に基いた立論はない。之に反して佛教發生當時及びそれ以後のスツーパに就いては文獻的にも亦遺跡の上でも相當に多くの貴重なる資料が殘つて居て事實に即した研究を大に促進せしめた。經典に見ゆる窣覩波や造塔法に關する記事も決して少くはない。而して文獻的に信頼し

得る主要なるスッーパとしては先づ第一に所謂舍利八塔を擧ぐべきであらう。又遺跡としてはサンチーの大スッーパを以て最もよき研究資料と爲し得るのである。

經典の傳へる所によれば釋尊が拘尸城外沙羅樹林間に於て涅槃に入りし時（紀元前四八五年頃）阿羅陀以下の弟子達は何れも涕泣して大に嘆き、やがて佛身を寶棺に納め數日間双樹の下に安置禮拜した後遂に拔提河畔に於て之を荼毘に附した。この時近隣八ヶ國の王達は釋尊入涅槃の事を聞いて直に使を派し争ふて佛骨を得べく強要した。そこで波羅門の香姓なる者は此の争ひを調停し舍利八分して拘尸、波婆、遮羅、羅摩、毗留提、迦比羅、吠舍離、摩揭陀の八ヶ國に與へた。所謂舍利八塔は實にこの時分配された佛骨を奉安供養すべく八ヶ國に築造されたスッーパのことである。又分配に遅れて到着せる卑鉢村の人々は火葬場に

残れる灰炭を得て灰炭塔を建て、更に争ひの調停者たりし香姓自身は分配に用ゐた舍利瓶を得て舍利瓶塔を建立したと云ふ（長阿含經第四、十誦律、第六十參照）。斯くて釋尊入滅後直に眞の佛骨を奉安せるスッーパ八基と他の遺物を收めた紀念塔二基とが建立されたと云ふ記録が殘つてゐるのである。けれどもこれらのスッーパは何れも古き昔に消滅して一つも遺存して居ないからそれが如何なる様式の、又如何なる規模のものであつたか全く知る由もない。その上この舍利八塔も實は後世の傳説に過ぎずして實在せしものに非ずと主張する者もあつたのである。然るに「八王起八塔、金瓶及炭灰、如是闍浮提、始起於十塔」が單なる傳説的記事たるに止まらずして史的事實であつた事を證明する一つの發見が一八九八年に行はれた。

英領ピプラワ（ネパールと英領印度との國境に位す）の附近には釋尊生誕の地たる藍毘尼園をは

じめ佛教關係の古き遺跡が少くない。ピプラワの幾つかの丘の中、一番高い丘を所有してゐたW.C.ペッペは一八九七年の春から附近の發掘を開始し、翌年一月に至つて一基の古きスツーパの遺跡を發掘した。このスツーパの圓形基壇は地表面より一三呎半の高さを持ち、直徑九〇呎あり、又その上の覆鉢は直徑約六二呎位あつたらうと推定された(テーガスン、印度及び東方建築史、上巻、七九頁)。

このスツーパは古き以前に破壊されたものゝ如く、從て原型を知ることは出來なかつたけれども、恐らくサンチーのスツーパに似た古制覆鉢形のものであつたらうと想像されて居る。昭和七年二月現地を訪ひペッペ氏の令息に案内されてこの遺跡を視察した故尾高鮮之助氏の日記によればこのスツーパは「今はもう發掘してから年月が立つてゐるので、中に木が生ひ茂つて居る。あたりは大形の固い煉瓦が散布して居る。その底そのものが、

その煉瓦を積んだもので、原形はわからなくなつてゐるが、やはり圓形を爲してゐた事は煉瓦の列の曲線によつて明瞭である」と(同氏著、印度日記、二八七頁)。又逸見梅榮氏はこのスツーパに就いて次の如く論せられた。「吾人は塔の構造即ち塔の底部と高さとの比、並に上代様の煉瓦や舍利壺上の字形等によつて、この塔が世尊の滅後百年までの間に建立されたものであらうと爲す推定を肯定するものである。然らばこの塔は佛と阿育王時代との中間に位するものであつて、この塔を通じて紀元前第四世紀の印度の文化狀態を窺ふことが出来るのである」と(同氏著、印度佛教美術考、建築編、三七頁)。乍然こゝで問題にしてゐるのはスツーパの様式や規模ではなく寧ろその基底の深き處からペッペの掘り出した大石櫃内の舍利壺である。この大石櫃内には數々の遺寶と數個の舍利壺が發見せられ、その中の一個、即ち小形の蠟石造の壺の蓋部には

「薄伽梵佛陀の遺骨を藏せる此の聖龕は釋迦族、即ち大聖の兄弟姉妹其兒子妻室等の所有に屬す」

と云ふやうな意味の古代文字の素朴なる刻文があり、從て舍利が釋尊入滅後八分された眞の佛舍利に相違ない事が證明されたのである。この壺は現にカルカッタ博物館に保管されて居り、又舍利は佛教國シヤムの國王に獻せられ、後同國王よりその一部が當時の公使稻垣滿次郎氏の手をへて名古屋の日暹寺に贈られ、この寺に舍利奉安の新しき塔婆の建立された事は周知の事實である。

さて上述の如く釋尊入滅後八ヶ國の王をはじめ多くの者が争つて佛舍利を得んと努めたのは何故であつたらうか。これは云ふまでもなく信仰の中心たる生身の釋尊が滅せられたのでせめてその肉身の舍利でも得て之を奉安禮拜し以て信仰の據り處となさんと欲したが爲である。けれども舍利の分量には限りがあり、之を分つとするも無限なる

古代印度及び錫器の塔婆（佐原）

を得ない。從て佛髮、佛爪、佛牙は云ふまでもなく、灰炭、舍利瓶、さては釋尊の用ひたる衣鉢や座具等の遺物に至るまで悉く信仰の對象として奉安せられるに至り、又後には釋尊の說法處、成道處、苦行處、入涅槃處、降誕處等の遺跡も神聖視せられ、之を紀念するためのスツーパも築かれるやうになつた。佛像のはじめて製作された年代は不明であるが、もし佛滅後六、七百年、即ち第二、三世紀の頃であるとする學者の推定（小野玄妙、佛教美術概論、八五頁）が正しいとするならば、それ以前即ち未だ佛像なき時代に佛舍利をはじめ種々の遺物が崇拜の對象となり、これを奉安するスツーパが禮拜の本尊として信徒の巡禮の中心であつた事も肯かれるわけである。

釋尊在世當時の印度は十六の大族と無數の小族

とが夫々獨立割據して互に霸を争ひ攻伐の絶えない時代であつたが、その後摩迦陀國の孔雀王朝の始祖チャンドラグプタは五河地方を奪取し四方を平定して大領土を占むるに至つた。チャンドラグプタの孫阿育王は祖父の偉業を繼ぎ南はカリンガ地方、北はアフガニスタン、ベルデスタンに及ぶ大版圖の統治權を握り、所謂全閻浮提 (Sakala Jambudvipa)、即ち全印度の統一を遂げた。阿育王の業績は獨り政治方面にのみ限られたのではない、寧ろ佛教の宣布こそは王の名を永久に忘れしめざる文化史上の大功績であつた。王が當時未だ印度諸教派中の一派に過ぎなかつた佛教に歸依し、之を國教と定め、その興隆と布教とに盡した多大の貢獻は屢々基督教に於けるコンスタンチン大帝の貢獻と並び稱せられてゐる。

傳説によれば阿育王ははじめ兇惡者梨とか暴惡阿育王とか呼ばれた程の殘忍極りなき暴君で、王

の殺戮せる女の數は八萬四千に及んだが、後佛門に入るに及び大に前非を悔むその罪業を償はんがために八萬四千のスツーパを各地に建立せしめたと、又一説に王は佛滅後八ヶ國に建立された舍利塔を悉く廢止してその佛舍利を一處に集め、更に之を八萬四千に分つて各地に送り阿育王塔八萬四千基を建てさせたとも云ふ。勿論佛舍利を八萬四千に分つことは殆ど不可能であらうからこの數は誇張に過ぎないかも知れない。けれどもその實數は別として王が佛教宣布の必要上、禮拜の中心物としてのスツーパをその廣大なる版圖の到る處に建立せしめたのは事實であらう。現に「大城の東南のかた六、七里にしてガンガ河の南に窣覩波あり、高さ二百餘尺、無憂王の建つる所なり」(大唐西域記、卷五、羯若鞠闍國)とか「如來は在昔頗る此の國に遊び給へり。故に無憂王は聖迹の處に窣覩波を建つること數十所なり」(同上、卷十一、信度國)とか、

無憂王即ち阿育王建立のスツーパに關する記事は西城記の隨處に發見せられ、同王所建の塔婆の如何に多數に上つたかを察せられる。

佛教興隆に盡した阿育王の貢獻は佛教美術の發達にも及んだ。殊に從來石材の使用は家屋(木造)の土臺とか城壁、城門、橋、土手等にのみ限られて未だ一般に石造建築の發達して居なかつた時代に、王がスツーパをはじめ種々の宗教建築物を石又は煉瓦を以て築かしめた事は特に注意しなければならない。史典の乏しき時代に於ける石造建築物がその耐久性の故に貴重なる記録として高き價值を持つ事あるは古代埃及のピラミッドやオベリスクに於ても知られる所であるが、阿育王建立の石柱^{スカラム}をはじめ、同時代の石彫の數々も同様な意味で今日頗る貴重な史的資料となつてゐる。阿育王建立の所謂八萬四千塔にして今日までそのまま遺存するものは一基もなく、從てその原形の如何なるものであつたかを正確に知り得ないのは遺憾であるが、印度に於ける阿育王沒後の政治及び宗教事情を考へるときはこれも亦止むを得ない事であつた。

二、サンチーのスツーパ

(イ) マーシャルのサンチー遺跡整備

サンチーのスツーパに關しては歐洲でも日本でも既に多くの學者が貴重なる研究を遂げ幾多の文獻が公にされて居る。けれども少くとも現地の記述的説明書としては印度考古學の權威者たるサー・ジョン・マーシャルの著「サンチー案内記」(一九一八年)が第一に擧げらるべきである。著者は一九一二年以來數ヶ年に亘つてサンチー丘上の諸遺跡を發掘復原し、從來の放置狀態から之を永久に保護すべく努力を續けた人であつて、この地の案内書を著すべく最適の經驗者であつた。以下

主として此の案内記を参考にし、更にその他の研究者の見解をも顧みつゝ近代に於けるサンチー遺跡發掘及び整備の事情を略述して見やう。

サンチーは今でこそ中部印度に於ける佛教建築美術史上最も重要な遺跡の存する處として世界各地の研究者を吸引する名所となつて居るけれども一八一八年にジエネラル・テトラーが多くの困難を犯して踏査し、次いでキヤプテン・E・フェル

の一八一九年一月三十一日ハシンガバードに於てと記されたノートが同年七月十一日のカルカッタ・ジョーナール紙上に發表せられ、この地が世に廣く紹介されるまでは幾久しきに亘つて全く却の世界に埋沒してゐた(A・グリューンウェーデル著、印度の佛教美術、英譯、二五頁、參照)。この地は汽車でボンベイから五四七哩、カルカッタから八九七哩、更にカラチからは一一六哩を隔り、且つカルカッタとカラチとの東西兩海港を結ぶ直線上の略中

心點に位してゐる。今はボーバール回教國のディワンガン郡に屬する一小村で、ビルサ市の南西五哩半の地點を占めてゐる。ビルサは古代東アルワの首府で毗地寫ヴィデイサと稱せられ、こゝから十二哩以内にはソーナーリー、サットダーラー、ピ・パリー、アーデール等六十餘基の古きスツーパを遺存する地が散在して居り、サンチーも亦この範圍内に属する村なのである。

サンチー驛の南方遠からざる處に高さ三〇〇呎ばかりの丘がある。此丘の上の高原は中央に鞍を置いた鯨の背の如き形を爲し、南北四〇〇ヤード、東西二〇〇ヤード位の廣さを持ち、二千年前の古き佛教最盛時代を偲ばしめる數々の遺跡を遺存して居る。丘は建築に適する砂石に富み殊に側面の砂石斷層は石切場として丘上諸建築物に石材を供給したらしい。丘の急傾斜面は到る處雜草木を以て覆はれ、特に南側に鬱蒼として繁茂する常盤木

は都會を離れたこの淋しき丘上の遺跡を深く隠し、中世紀以來ビルサの都市を度々掠略せる回教軍にもその存在を知らしめなかつたのである。

上述のジエネラル・テーラーがはじめて此の丘を踏査した時大スツーパの外周を飾る四つの塔門の中、南側のもののみが倒れて他は何れも舊状を保ち、又巨大なる覆鉢も、その上の欄楯も無事であつたと云ふ。テーラーの踏査は忽ち世人的好奇心を唆り、それ以來現地を訪れる者少からず、中には貪慾な商人や素人考古學者にして亂暴な發掘を行ひ遺跡の破壊冒瀆を爲すものもあつた。又キヤプテン・フェルは大スツーパの覆鉢がその内部に設けられた支柱の如きものによつて支えられてゐるであらう事、又塔内には若干の空室のあるであらう事等を想像して大に發掘調査の必要あるべきを強調した(丁・カミング編、印度の過去示顯、三一四頁、参照)。而してこの想像は當時のボーカールの

長官マドック及びその助手たりしキャブテン・ジョンソンを刺戟し、彼等をして遂に一八三二年大スツーパの片側を頂上から基底の所まで開いて探索は只その後の大スツーパ大破の原因を作らしめた以外に何等貴重なる發見を爲さしめなかつた。ジョンソンはこの大スツーパのみならず約三年前にテーラーが訪問して極めてよく保存されてゐたと告げた他の第二及び第三のスツーパにも破壊的發掘を行つたのであつた。次いで一八四九年には印度政廳より中央印度ベトワ地方の考古學特別調査を委嘱されたF・C・マーシーがサンチーの諸スツーパとその彫刻及び刻文に關する挿畫入報告書を作つた。その後一八五一年にはアレキザンダー・カンニンガムもマーシーの一行に參加し大スツーパを發掘し又第二及び第三スツーパの内部からは夫々數個の舍利容器を發見した。

斯くの如くサンチー丘上遺跡の調査が進むにつれて世人の之に對する關心も高まり、例へばナボレオン三世はカンニンガムの著「ビルサのスツーパ」(一八五四年)に依て大スツーパを飾る塔門の印度美術史上極めて價値高きを知り、その一つを佛蘭西へ移送せしめんとした程であつた。尤もこの計畫は實現に至らず中止されたが然もこれが間接の動機となつて一八六九年には大スツーパ東門の實物大塑造が作製せられ、巴里、倫敦、柏林、エディンバラ、ダブリン等の博物館に寄贈され、歐洲に於て古代印度藝術理解上のよき参考品となるに至つた(A・フーシュ著、佛教藝術の濫觴、六二頁、參照)。

けれども他方サンチーの現地に於ては依然破壊的探索のみ行はれて遺跡の保存及び修理復原等に意を用ゐる者はなかつた。そこで一八八一年に至り漸く現地の修理保存の計畫が立てられ、古代紀念物管理官に就任したH・H・コールは先づ最初に丘上の雜草を刈り取り、約六十年前にキャプテン・ジョンソンの破壊した大スツーパの大龜裂を充填し、更に約二ヶ年の間に印度帝國政府の支出せる費用を以て南側及び西側の倒れた塔門を再建し且つ第三スツーパの唯一の塔門をも修理再建した。サー・ジョン・マーシャルがサンチーに於ける劃期的修理整備作業を開始したのはコールの復舊事業後約三十年を経た一九一二年のことであつた。マーシャルはボーバール回教國の女王^{ビーガム}の熱心なる後援と印度帝國政府の出資とを得て大規模の發掘及び復原作業に力を注ぎ、その結果丘上の面目を全く一新せしめるに至つた。彼のこの復舊事業は次の四段に分けて實行された。即ち先づ第一には丘上平原を圍繞する中世紀以來の石垣内の廣範なる地域から密生せる雜草木を一掃すること、

第二には大スツーパの南東及び北東の廣い區域を發掘し且つその邊一帶を埋めてゐた土石の屑を除

去すること、第三にはスッーパ以外の古き諸建造物の倒壊せる多數の石材を取り集め、それを以て舊敷地に復原的再建を行ひ、且つ暴風雨等の被害を少からしめるために十分補強工事を施すこと、

第四には丘の各部分より出土せる多數の遺物を蒐集保管し之を陳列展覽に供するための博物館を建設し、他方又丘上の起伏をならして平坦に爲し芝生を以て之を覆ひ、新しく適當な樹木や蔓草を植え以て久しく荒廢してゐた聖地を美化することであつた。以上四段の大事業に専心努力し且つその大部分を完成し彼の念願たりし博物館の落成も近きに迫つた時マー・シャルはサンチーを去つて他に

轉任したのであつたが、サンチー復舊事業に示した彼の功績は洵に大なるものがあつた。その業績の主なるものを列舉すれば次の如くである。

一、第三スッーパの覆鉢及び欄楯の復原。
二、大スッーパの南側に面する支提遺跡に殆ど

倒落せんとして居た列柱の再建。

三、大スッーパ覆鉢の南西四分圓の復舊（これによつて欄楯の一部及び二つの塔門の倒壊を免かれしめた）。

四、大スッーパの竿蓋の復原、階段及び基壇上の彫刻ある欄楯の復原。以上

かかる不朽の功績を残したマー・シャルは在カルカッタ印度博物館考古學部主任たりしラ・マ・プラサード・チャング氏の云つたやうに「單に過去を再現せしめたばかりではなく、殆ど過去を再創造した」（カミング編、前掲、三一五頁）ものと云へるのである。

(ロ) サンチーの古史

サンチーが多くの佛教建築物を擁して榮えてゐたのは十二世紀頃までであつたらしい。而して此

等の建築物の中最も古きものは阿育王時代に歸せしめられてゐるけれどもかかる多くの古建築物を

遺存するに拘らずサンチーと云ふ地名も亦その古き呼稱であつたと稱せられるカト・カナーダと云ふ名でさへも佛教の經典中には全く言及されて居ないと云ふ。又四世紀頃に天竺各地を巡歷して法顯傳を自記した東晉の法顯三藏及び七世紀に同じく印度の古聖地を普く巡禮して大唐西城記を著した唐の玄奘三藏は共にサンチーに就いては一言半句も述べてゐない。これらの事實を理由として多くの學者はサンチーが釋尊成道の地たる佛陀伽耶や、最初の說法行化の地たる鹿野園の如き古き由緒ある聖地たるに非ざるは勿論、更に恐らくは釋尊の足跡を印せられし事すらなき無縁の地であつたらうと考へて居る。若し斯くの如くサンチーが

マハーラーナダ第十三章の傳説によれば摩揭陀國の太子阿育はその父から與へられた阿盤提國を統治してゐた頃、尉禪尼國の副王に任せられ同國へ赴く途中毗地寫(卑提寫とも書く)城市に滯在した。太子はこの地でデーヴィと名づくる長者の美しい娘を得て之と同棲し、摩晒陀を誕生せしめた。

又二年を経て娘僧伽密多が生れた。後太子が摩揭陀國の王位に即くや王子摩晒陀は佛教宣布のためスッーパ、第二、第三及びその他の諸スッーパ、石柱、支提、僧院等幾多の極めて古き佛教建築物がこの丘に建てられるに至つた理由を何に求むべ

きであらうか。これに就いてはファーガスン(前掲、上巻、六七頁)もマーシャル(サンチー案内記、八頁)も亦他の多くの學者もメイシーの説を紹介し、錫崙の古史たるマハーラーナダ中の傳説を引き合ひに出して佛教の恩人阿育王の妃の住地とサンチーとの符合を以て説明してゐる。

マハーラーナダ第十三章の傳説によれば摩揭陀國の太子阿育はその父から與へられた阿盤提國を統治してゐた頃、尉禪尼國の副王に任せられ同國へ赴く途中毗地寫(卑提寫とも書く)城市に滯在した。太子はこの地でデーヴィと名づくる長者の美しい娘を得て之と同棲し、摩晒陀を誕生せしめた。

又二年を経て娘僧伽密多が生れた。後太子が摩揭陀國の王位に即くや王子摩晒陀は佛教宣布のため王の庇護の下に錫崙へ派遣され、大なる功績を挙げた。これより先摩晒陀錫崙に出發するに當り母后デーヴィを毗地寫の附近なる支提祇離に訪ひ、宏

壯なる僧院に宿泊したと云ふ（平松友嗣譯註マヘー・ダッサ、一三二頁参照）。もしこの傳説が正しいとすれば毗地寫の附近の支提耶祇離とは即ちサンチー丘上の僧院を指したに相違ないと推定するのである。

何故ならば阿育王が他の紀念建築物と共に特に誥文を刻んだ石柱^{スタン}の一つを建てたのは此の附近ではサンチーに於てのみであり、且つ孔雀王朝時代の遺物の在るのも亦この附近の地方ではサンチーのみであるからであると。

サンチーの古史に關しては右の如き推測以外に何も知られて居ない。從て他に依據し得べき史實の現れざる限り、マハー・ヴァンサの記事とサンチー遺跡調査とに基いて立てられたこの推測は唯一の手掛りとして少くとも多少の價値を持つものと云はざるを得ない。

(ハ) 大スツーパ

大小合せて三十基に近き多數のスツーパの遺趾

を持つサンチーに於て第一スツーパ又は大スツーパと稱せられるものはその古き點に於ても亦規模の大なる點に於ても第一位を占むるものである。

この大スツーパは阿育王の治世中（紀元前二七三—一二三二年）の初建として推定されるのであるが、然し

同王が最初から現在見られるが如き大規模のものを築いたわけではなかつた。この塔婆の中核の部分は外構部に使用された材料とは全く異なる孔雀王朝時代（紀元前三二〇—一八〇年）特有の煉瓦（長さ一六吋以上、幅一二吋以上、厚さ二吋以上のもの）で造られてゐた。この事實は大スツーパ初建の年代を推定せしむる一つの根據を與へたと同時に又

外構の部分が後世の擴張に依て構へられたものなる事を明かにした。恐らく最初阿育王時代にこの塔婆が築かれ、次いで紀元前二世紀の中頃スンガ王朝の始祖にして且つ佛教の彈壓者であつたブシヤミトラによつて破壊されるまでは上述煉瓦造り

の中核の部分のみのものであり、從て現在の大塔

婆の約半分位の大きさしかなかつたらうと考へられ

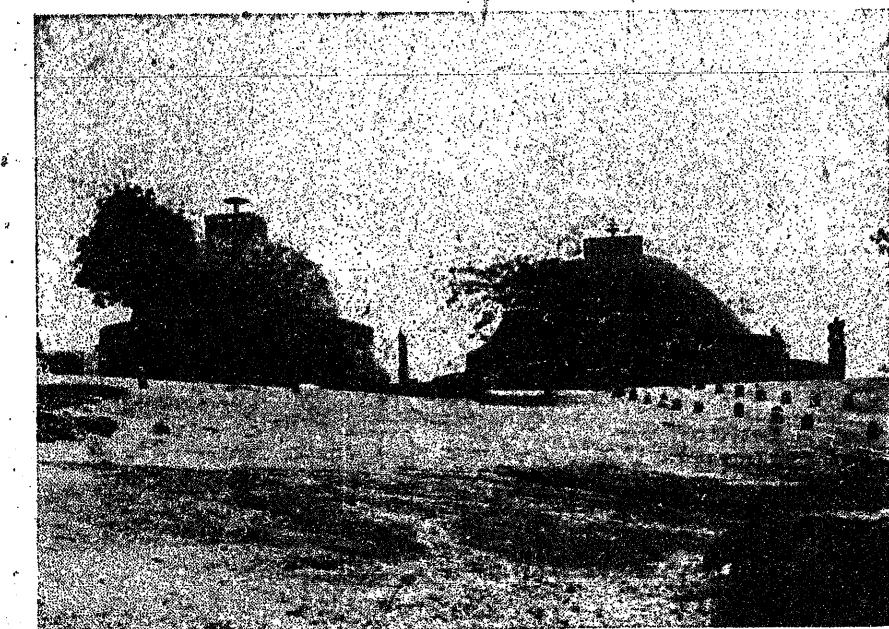
る。又初建

當時のこの

損せる塔婆を中核となしその周圍に外構を加へ擴大して成れるものであるが、かかる擴大被覆はサンチーの大スツーパに對してのみならず、同じく

塔婆の形狀に就いては明確なる斷定を下し難いが、近年

阿育王初建と推定せられたサルナート及びタクシラのスツーパ、更に又錫崙島の古きダーガバなどに於ても行はれたのであつて印度にはその例が決して少くはない。



第一圖 サンチー大スツーパ(右)と第三スツーパ(左)

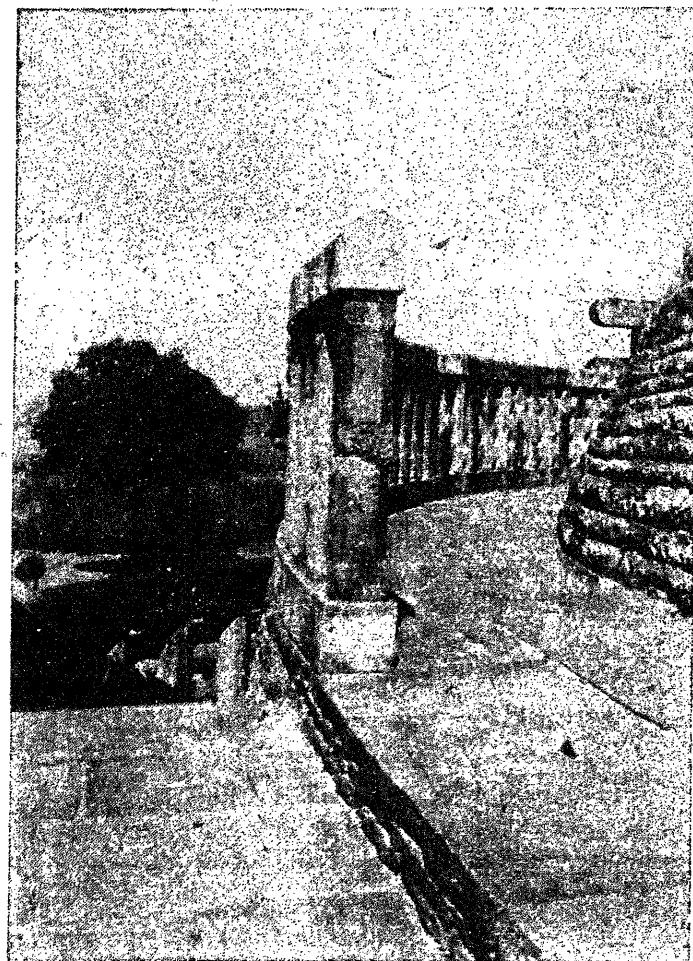
その附近より發掘された極めて古

き盤蓋の断片などより想像して、

周圍に木造の欄楯を繞らし石造の盤蓋を戴いた頗る簡素無裝飾的なものであつたらうと思はれてゐる。

さて次に大スツーパの構造に就いて少しく説明をして見やう。この塔婆は基壇、覆鉢、平頭、及び盤蓋の四部より成り、この外に附屬建造物として欄楯、塔門、及び阿育王の誥文の刻まれた石柱を備へてゐた。スツーパそのものは比較的に低い圓形基壇とその上に築かれた半球體の塔身、即ち覆鉢とを主要構成部分として含む。尤も一般には先づ基壇が設けられ、次いで覆鉢部がその上に置

かれたものの如くに考へられさうであるが、實はその反対であつて覆鉢部がはじめに累積せられその周圍にあとから基壇が附加されたのであつた。基壇は底徑一二〇呎、頭徑一一八呎、高さ一四呎の圓形プラットフォームで、地表面にはこれを一周する繞道を設け、又基壇の上面にも幅六呎ばかりの繞道を作つて中央の覆鉢を一周して居る。こ



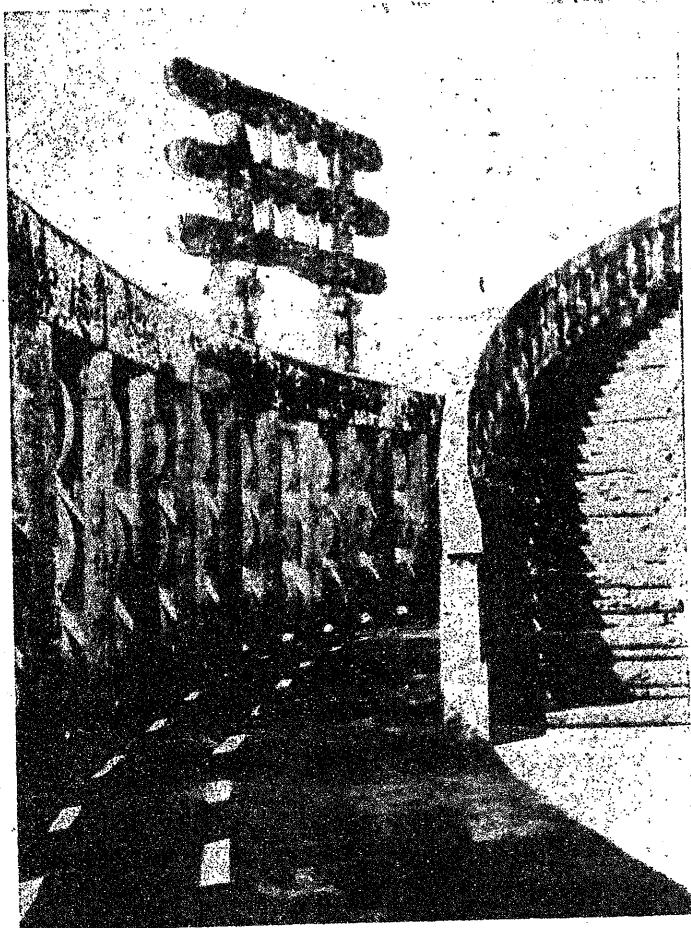
第二圖 サンチー大スツーパの上繞道と欄楯

段に設けたことに就いて逸見氏（前掲、四四頁）は上繞道を以て僧衆の用ひしもの、又下繞道を一般俗人の巡回せしものではなかつたらうかと想像された。尙下繞道から上繞道へ達するには南側塔門の内側に築かれた sopana と名附けられた階段（左右兩側に段があり、且つ石造欄楯を持つ）を利用する。

次にスツーパの塔身、即ち基壇上に鉢を伏せたやうな形を爲す部分は anda (卵を意味す) と稱せられ、恐らく土石を築き上げた土

れら上下二段の圓周繞道は Pradakshina patha と呼ばれ、初期佛教徒が供養に際してスツーパを右側に拜しつゝ巡回する（これを鉢喇特崎禦、即ち右繞三匝と云ふ）ために造られたのである。勿論巡回は三周に限られたわけではなく、七周、十四周、時には百八周に及ぶことあり、何れも一種の儀式として行はれたのである。又繞道を上下二

饅頭式の塚の進化せるものと考へられる。擴大後の此の覆鉢は截頭半球形で高さ四二呎直徑一〇六呎、中部印度に遺存するスツーパ中最大のものである。最初に煉瓦を以て築かれた中核の部分は本



第三圖 サンチー大スツーパ下繞道、塔門、欄楯

來舍利奉安を目的として建立されたのであらうが、近代に於ける數回の發掘にも拘らず遂にその

中から舍利を發見する事が出來なかつた。マーシ

ヤルはこの孔雀王朝時代の中核が後に如何なる方法で擴大されたかを考究して次の如く説明した。
即ち先づ中核の周圍に一定の距離を置いて厚い板石を立て繞らし、中核との間に野石を詰め込みつつ板石層を高めて行つたのだと。斯様にして擴大された覆鉢の石積層の外表には更に厚くコンクリートを塗り、その表面を一層緻密な漆喰を以て固めて大體の仕上げを終つたのである。この古き漆喰塗りは殆ど皆落剥して了つたがそれでも尙多少殘存してゐる部分もある。尙ほこの塔婆の東側塔門の一部分に刻まれた浮彫のスツーパや或は又有名なアマラヴァチ塔婆の欄楯上に刻まれた同様の浮彫スツーパ形などから想像して恐らくサンチーの大スツーパに於ても上述漆喰の表面を更に懸華や華飾を以て賑かに飾つたことがあつたらうと考へられる。

以上述べた基壇と覆鉢とは現存の遺構に依て明

確に原型を知ることが出来るのであるが、覆鉢から上の部分が如何なる姿を呈したものであつたかはその部分の全く脱落したまゝ發見せられた荒廢のこのスッーパに於て判明せしめることが出来なかつた。けれどもマーシャルは覆鉢の頂上たる直徑約三四呎の圓形平面に、發掘によつて得た古き石材を多く使用して、方形の欄楯を設け、その中央に高さ一呎八吋、徑五呎七吋の蓋で被はれた方形石櫃を置き、更にその上に支竿を立て三重の傘（盤蓋）を加へて復原を完成した。この石櫃部は元來舍利を收めるために設けられるもので梵語の *harmika* 卽ち我國で平頭、露盤、又は方龕などと呼ぶものに相當する。松本文三郎博士は嘗て印度に於ける佛教以前の塔とそれ以後の塔と題する論文（夢殿、第十冊、特別號、七頁、參照）に於て「佛舍利」に於て之を三重にしたのは鄭重を意味したのか或は又形式美をとゝのへるためかの何れかであつたらう。何れにしても最初木材を以て作られたらうと推定せられる古き支竿及び盤蓋は遠き昔既に

朽敗し、更に後世になつて附加された石造のものさへ崩解して丁つたのであつた。從て若しマーシヤルの復原作業が加へられなかつたならばこの大塔は例へばファーガスン(前掲、上巻、六九頁)の示した挿畫に於けるが如く支竿や盤蓋を缺いた不完全な荒廢的殘骸を曝すに止まつたであらう。

大スツーパの構造に就いての略述は以上を以て終へ次に印度彫刻史上最も貴重なる資料とも云ひ得べきスツーパ附屬建造物の主なるものに一瞥を與へることとする。先づその一は vedika 卽ち欄楯(周垣、玉垣とも云ふ)であつて、これは上下兩繞道の周圍、兩者を連絡する階段とその踊場との外側、及び平頭の周圍に設けられたものである。その中上繞道及び階段の外側に立つ欄楯には種々の面白き裝飾的彫刻が施してあつたがその他の部分の欄楯は何れも無裝飾の極めて單純素朴なものであつた。欄楯は thabha (柱)、suchi (貫) 及び

ushnisha (笠石) より成り、これら諸部の組み方及び構造には木造玉垣に慣用された様式を石材に應用したと思はれる手法が見られ、この欄楯が本來は木造であつたらう事を暗示してゐる。フーシニ(前掲、六五頁)がこれらの欄楯と後述する塔門とを以て石工の作と云ふよりは寧ろ大工の作としか思へぬと云ひ、且つ古代印度の職人がかかる構造を石材に適用した大膽さに驚嘆したのも無理はない。尙下繞道の外側に設けられた欄楯の貫の中には笈多王朝の九三年(西暦四一二一四一三年に相當す)及び一三一年の年代の刻まれた二個の石材が發見せられ、これに依てその部分の欄楯の造られた時代が判明し又その他の殆どすべての石材に刻まれた初期ブラーミー文字の記銘によつてこれらの石材が個々の信徒なり、講中なりによつて寄進されたものなる事も證明された。

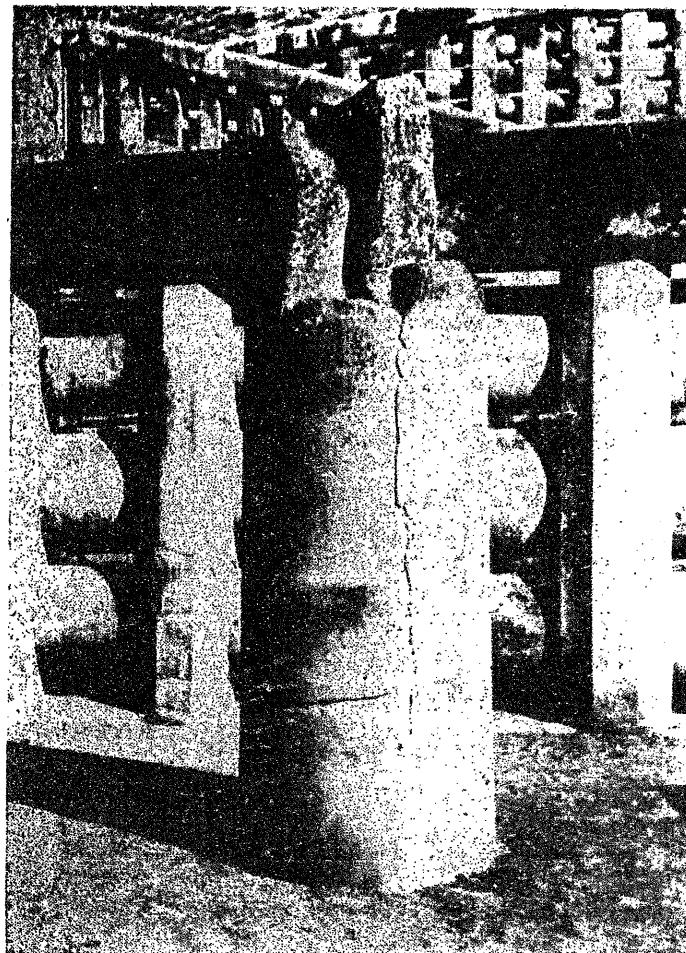
大スツーパの外側の各方位基點に當つては夫々

一つ二つの塔門が立つて居る。塔門は torana と稱せられ、二本の角柱を立てその上に夫々束を以て隔てられた三本の横材及び數個の小支柱を組み合せたものである。四つの塔門の中最もよく保存されてゐる北側の門は全體の高さ三五呪、左右二本の大角柱はその柱頭をも加へて一八呪、又平行に重ねられた三つの横材の中一番下のものは長さ二〇呪ばかりである。東西及び南の他の三塔門も大體北塔門と同様の構造である。これらの塔門に刻まれた無數の浮彫及び丸彫は夫々深き意味を持ち、本生譚をはじめ初期佛教史上の諸事件を表現し、例へばフレシニ（前掲、六六頁以下）の行ひし如く、一々その寓意を求め之を解釋玩味すれば洵に興味盡きざるものがある。尙塔門の石材中に刻まれた記銘や彫刻の手法技巧等によりマーシャルは南塔門を最も古きものと推定し、他は北、東、西の順で立てられたものらしいと考へた。而して最

も新しいとされた西塔門は技術的にも一番劣つてゐると云ふ。これらの塔門は上述の欄楯の場合に於けると同様に木材にのみ適する組み方を白色砂岩の石材に應用し、その上複雜微妙な彫刻を無數に施したものであつて、この時代の印度佛教美術發達の程度洵に驚くべきものありしを示してゐる。この種の塔門を以て支那の牌樓、我國の鳥居の原型であつたらうと考へる説は多くの學者の傳へる所であるが果して然るや否やは依然疑問である。

大スッーパ附近に存する古代の遺物の中最も重要なは阿育王石柱^{スタブ}である。この丘の上で發掘された柱身や柱頭の斷片の數によつてもこの附近に嘗て存在せし石柱の相當に多かつたらう事が知られるが、然しその大部分は笈多朝のものに屬し大して價値なき小石柱であつたらしい。只大スッーパ南塔門の近くに發見された阿育王建立の石柱は

その大きさに於ても、亦出來榮えに於ても特に注目すべきものであり、殊に大スツーパの石造外構と下繞道外側の欄楯の設けられた時代を推定すべき手掛りを與へるものとして考古學上重要な意義を



第四圖 サンチー大スツーパ附近の阿育王石柱

んとさへしたのであつた。從て今日では石柱全體の原型をそのまま見ることが出來なくなつてゐるが、それでも柱脚は初建の場所に遺存し、又柱身の大斷片二本はそのそばに置かれてゐる。四頭の獅子を背中合せにした姿を丸彫した柱頭は現にサンチー博物館内に保存されてゐる。これららの断片を集めて推定した所によればこの石柱は四二呎の高さを有し、且つその美しく磨き上げられた先細の圓柱は單體石モノリットであつたのである。

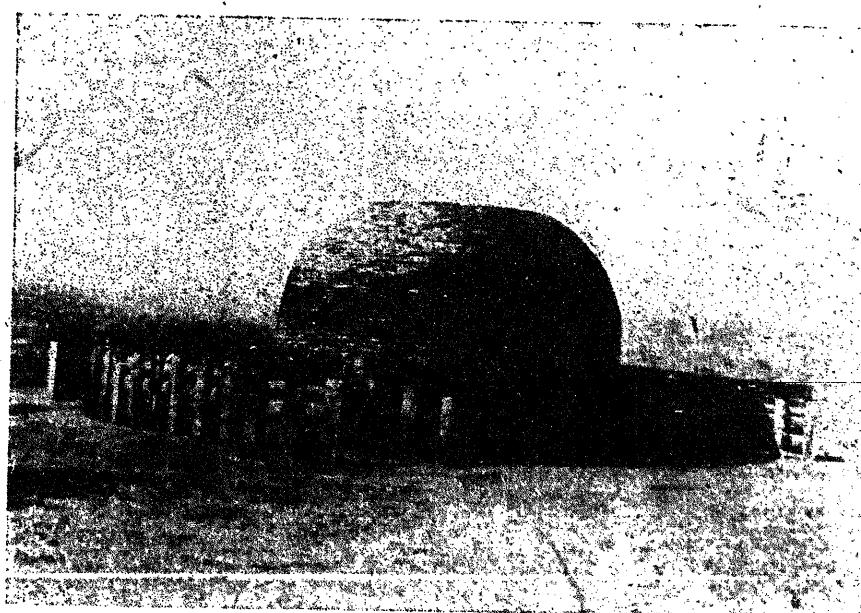
印度古代の紀念的石柱が果していつ頃初建されたかは不明であるが現存最古の石柱がサンチー、サルナート、その他佛教の諸靈地に遺存する阿育王所建のものであるのは確實である。然も西歐の諸學者は何れもこの石柱に刻まれた誥文が波斯のアケメニア王朝諸王のベヒスタンその他地の岩崖に刻んだ誥文に影響されたものであつ事が知られた。尤もこの石柱はこの地方の無知にして没趣味な地主のため數十年前に數個の断片に切斷せられ甘蔗壓搾用の道具として利用され

り、又鐘形柱頭や溝彫なく滑かに磨かれた柱身がペルセポリスその他の地に遺存する波斯式石柱の模倣であることを強調して居るが、阿育王石柱に於ける波斯藝術の影響は否定出来ない所であらう。けれどもこゝで問題としてゐるのはサンチードスツーパの年代に對する暗示をこの石柱が與へてゐると云ふ事實である。マーシャル（前掲、九四頁）によればサンチードの阿育王石柱は同地に於ける現在の地表面より約十二呎ばかり低き所に在る固き岩石上に立てられたのである、而してこの岩石表面から八呎ばかりの高さに及ぶ柱脚部はハンマーを用ひた打製の圓形柱であり、これを圍んで築かれた矩形の石壁との間には重い石塊が詰められて柱脚の傾斜を防いで居た。これらの石壁及び詰石のすぐ上には厚さ約六吋ばかりの床が石で舗装されて居り、それは石柱のハンマーで仕上げられた部分とその上の美しく磨かれた部分とを區割

する境界線に相當してゐる。從てこの床こそは石柱初建當時の地表面に合致したものと推定されるのである。現在の地表面はその石の舗裝が破壊されではあるが石柱初建當時の地表面よりは約四呎高くなつてゐる。然も新舊兩地表面の間には更に夫々異なる厚さを持つ三段の床が發見された。そこでマーシャルは彼の度々行つた印度古代遺跡發掘の經驗に照して、中間に三段の床を挿んだ約四呎の深さある土砂の堆積が到底一百年以下の年月中に作らるべきにあらざるを説明し、且つそれは數世紀に亘る長年月の介在すべきを主張した。而して阿育王石柱初建當時の地表面を示す最下の床が作られたのは紀元前二世紀の中頃より遅い筈ではなく、從てこの石床と同時に築かれた大スツーパの石造外構と下繞道を圍む大欄楯との初建も亦その頃であつたに相違ないと考證した。

(ニ) 第二及び第三スツーパ

サンチーに於て第二スツーパと呼ばれてゐる古塔婆の遺跡は丘の西側を半ば降りた處の岩棚の上に在り、覆鉢とその周囲の欄楯とをのみ残す不完全な姿を呈してゐる。この塔婆は後述する第三スツーパと同様に孔雀王朝の崩解後毗地寫を首府として成立したシニンガ王朝時代（紀元前一八八一七六年）に築造されたものと推定されて居る。キャブテン・ジョンソンがはじめて此のスツーパを開発したのは一八二二年であつたが、次いで一八五一年にはA・カンニンガムもこれを發掘して内部から一個の舍利櫃を發見した。舍利櫃は長さ二時、幅及び深さ共に九吋半の白砂石で出來て居り、覆鉢の中心より約二呎西に寄り且つ基壇の頭部より約七呎の高さの處で發見された。而してこの櫃には初期 Brahmi 文字で Kāsapagota 及び Va-



第五圖 サンチー第二スツーパ

chhi Suvijayata をはじめすべての教師達の舍利と云ふ意味の刻文が認められた。又櫃内には夫々人骨の小片を収めた滑石製舍利瓶四個があつてその瓶に刻まれた文字により、佛滅後二〇〇餘年、即ち紀元前三〇九年頃阿育王の主催せる第三回大集會に出席せる人々やその時の決定教義を宣布すべく雪山地方へ派遣された聖者及び教師達十人の

舍利を收めたものなることが明かにされた。此等十人の聖者及び教師（その名はマーシャル著、前掲、一三六頁に列舉しあり）は何れも阿育王と同時代の人々ではあつたが死後直にこのスツーパの中に葬られたのではなく、それ以前別々に何處かに葬られてゐたのを後に一つにまとめ、更にシュンガ朝時代に至つてはじめてこの第二スツーパに合葬されたものと推定されてゐる。

次に所謂第三スツーパは大スツーパの北東約五〇ヤードの處にあり、可成り以前に修理復原されて覆鉢及び相輪は勿論、欄楯や塔門の如き附屬物もよく整備されて、復原前の寫眞と見比べると全く同一のものとは思はれぬ程になつた。但し塔門は南側に一つ立つのみであり又外周の欄楯を失つて居るので完全な復原とは云へない。尤もこの欄楯を構成せし石材の断片は塔婆の附近や更にその近くにあつた祠廟の土臺からも發掘されたので、

恐らく古き時代にこの欄楯は崩されて他の建築物に移動利用されたものと考へられてゐる。而してこの欄楯が蓮花の浮彫を持つ高さ約八呎位のものであつたことも發掘された少數の石材断片によつて明かにされた。

第三スツーパの高さは約二七呎、覆鉢の直徑は四九呎六吋であるから大スツーパよりは遙に小さく、第二スツーパとほゞ同じ大きさである。又覆鉢は半球體と云ふよりは寧ろ半隋圓形に近く從てそれがだけ丸味が勝つてゐるが、これは大スツーパより後の二層發達した塔婆形式の共通特徴を示したものである。基壇頭部の外側及び基壇上の繞道へ達する階段の外側には美事に復原された欄楯が設けられ、又梯形階段の踊場に立つ隅柱には恐らくこのスツーパの原型を模寫したと思はれる浮彫が残つてゐてマーシャルの修理復原に大に参考になつたと云ふ。尙南側に一つだけ孤立する塔門は今

日サンチー丘上で見られる五つの塔門中最も新しく、多分紀元前一世紀頃に附加されたものの一つであらうと想像されてゐる。

上述の第二スツーパ内に舍利櫃を發見したカンニンガムはそれよりも以前既に第三スツーパを發掘して重要な發見を遂げてゐた。即ち彼は覆鉢の中央、丁度基壇頭部の高さの處に長さ五呎の大きな板石で覆はれた一室を開き、その中から厚さ六時の蓋のある一呎六吋平方の二個の石櫃を取り出した。この二つの中南側にあつた石櫃の蓋には Sariputra 又北側の分には Mahamogalana と云ふ人名が刻まれて居た。更にサーリップートラの石櫃の中からは小片の人骨、珠數、眞珠、瑠璃、水晶その外の寶石を收めた白い滑石製の平たい舍利瓶が出てきた。而してこの舍利瓶のわきには二本の白檀の小片が置かれてあつたと云ふがこれを見たカンニンガムは多分遺骸荼毘の際に堆積された白檀

の薪を紀念したものだらうと想像した。同様に小片の人骨その他を收めた滑石製舍利瓶はマハーモガラーナの石櫃からも發見された。かくてこの第三スツーパは結局サーリップートラ及びマハーモガラーナの遺身舍利を奉安せる塔婆なることが判明した。この二人の人物は夫々漢字で舍利弗及び大目犍連と書かれる尊者であつて、はじめは共に那爛陀村に住みし學者として聞え、後には相携えて釋尊の門に入り遂には學識深き高弟として尊敬された人々であつた。この兩尊者の死せる時釋尊は二人のためにスツーパ建立を許可されたと云ふ傳説(四分律、第五十二、參照)はあるも、第三スツーパはそれよりも數百年を経て築かれたものである。恐らく阿育王の時代に何處からかこれらの舍利がサンチーに送られ、石櫃に收められて一旦大スツーパの附近に埋葬せられ、更に二百餘年を経て築かれた第三スツーパの中に移し奉安されたものだ

らうと推定されてゐる。

三、窣観波と制多

梵語 *stupa* と巴梨語の *thupa* とは共に墳墓を意味する言葉であつた。スツーパ又はツーパの字音を表した漢字綴は頗る多い。例へば窣観波、窣都波、素観波、敷偷婆、敷斗婆、蘇偷婆等はスツーパの、又塔婆、鎌婆、偷婆、兜婆等及び更に簡単に略した塔はツーパの音譯であらう。舍利を埋葬する處と云ふ意味のスツーパを表す譯語としては塚、圓塚、墳、方墳、廟等が用ゐられ、土石を積み上げると云ふスツーパ本來の意味を表すものとしては積聚、大聚、積集など、又その高き相を示し或は高處に營まれると云ふ意味を含むものとしては高勝、高顯などの義譯が行はれてゐる(小野玄妙、前掲、五〇頁以下参照)。この外になほ制多なる文字を以てスツーパを表すこともあるが、この語

は梵語の *chaitya* の音譯で、制底、制底耶、制帝、支提、支徵、脂帝、際多などとも書き、又意味の上からは聚相、高墳、靈廟、可供養處、生淨信などとも呼ばれる(逸見氏、前掲、八九頁参照)。然らばスツーパとチャイチヤとは果して同一のものなのであらうか。本來の語義に於ては兩者とも累積 (heap) 又は塚 (*tumulus*) を意味する(アーラークン、前掲、上巻、五五頁脚註参照)言葉であるから同一のものだと認めてよいのであるが、少くとも建築史の上では區別して使用される場合も多いのである。從來この兩語の混用されたことに關して逸見氏(前掲、一〇四頁)は次の如く述べられた。

「制多とは用例から見れば本來禮拜供養處の義である。故に廣義に解すれば窣観波も制多の中に含めらるべきである。然し狹義には禮拜の祠堂を稱して制多とする。故に制多の本尊は苟も禮拜の對象たり得るものは皆可なりである。然るに紀元前

後までの制多は多く塔を安置する。かくて制多とは塔を安置する祠堂を指すに至つた。然もその塔は身舍利なき塔である。こゝに舍利なき塔を制多と呼稱するに至つたものであらう。窣覩波と制多との間に混同がもあるとするならば、かくの如き経過をとつて生じたものと推定する」

かくて逸見氏は制多を以てスツーパよりも包括的名辭であると解せられ、制多の中にはスツーパと、スツーパにあらざるもの（狹義の制多）とが含まれ、更にこの狹義の制多の中には禮拜の本尊として塔を安置するものと然らざるものとがあると見て居られる。恐らくこの見解は最も妥當なるものであらう。而して逸見氏の所謂狹義の制多の再分たる塔院（堂内に塔を安置するもの）と佛殿（精舍とも稱し佛像を安置するもの）との區別に於て、前者、即ち、塔院の中に奉安せられる塔が如何なるものであるか、又それが屋外のスツーパ即

ち露塔と如何に異なるかは佛塔研究上重要な課題の一つであると思ふ。

逸見氏の所謂塔院は制多堂又は塔廟とも稱せられ梵語の *chaitya-griha*、巴梨語の *chetiya-ghara* に相當するものと思はれる (J. Ph. フォーゲル著、印度、錫

崙及び瓜哇の佛教美術、英譯書、五七頁参照)。而してこのチャイチャ・グリハはハーヴェルの用語法に従へばチャイチャ即ち屋内の塔を奉安する祠堂であつて、スツーパそのものではない (ハーヴェル前掲、六五頁参照)。然るにハーヴェルの所謂チャイチャをフアーガスンはダーガバとも呼び又マーシャルはそのままスツーパと稱してゐる。斯くの如く學者によつて同一の對象を種々異なる名辭を以て指稱してゐてこれを統一することは甚だ困難である。從て或る種の學者の用語慣例に違反することもある。うちれども、こゝでは便宜上サンチーのスツーパ、の如き屋外の露塔をスツーパと名づけ、アジンタ

やカルリの岩窟内祠堂に奉安された塔の如き
屋内塔を制多と呼んで説明を進めることとする。
以上の如く便宜上區別した場合のスツーパと制多
との相異は一方が屋外的であり、他方が屋内的で
あると云ふことの外に、更に前者が舍利を含む塔
なるに反し、後者が舍利を收めざる塔であると云
ふ摩訶僧祇律三十三の規定を或る程度まで認めた
ことになる。然らば舍利塔に於ける舍利とは何を
意味したものであらうか。舍利（室利羅又は設利
羅などとも綴る）は本來梵語の *saria* を音譯した
名辭であつて身骨を意味した。從て舍利を含む塔
は明かに墳墓の一種でなければならなかつたが、
既述の如く、釋尊入滅後荼毘に附せられた遺骨が
各方面から分配を要求せられ、然もこれら全部の
要求を充たすことが出来なかつたので佛舍利に準
すべき灰炭や舍利瓶さては佛使用の衣鉢や座具な
どの遺物までも禮拜供養の對象としてスツーパの

中に奉安されるに至つた。更に後世になると法身
舍利又は法舍利とて例へば、法華經、寶篋印經、
金光明最勝王經などの佛所説の法教を奉安するス
ツーパも築かれるやうになつた。從てスツーパの
奉安する舍利なるものも初めは眞の意味での舍
利、即ち身舍利に限られたのであつたが、後には
漸次にその意味が擴大されて舍利に準すべきもの
をも包含する廣義の舍利を意味するやうになつた
のである。

次に屋内の塔即ち制多を安置する祠堂又は制多
堂とは如何なるものであらうか、ハーヴェル（前掲、
六六頁）によれば制多堂の最も簡単なる構造はドー
ムによつて覆はれた半圓形の後陣アーチスと、その前に設
けられた矩形の身廊ネイヴとより成り、制多は後陣の中
央に安置せられ、入口は後陣に連らならざる方の
身廊の先端に作られた。又身廊の前に更に前殿を
設け供養に參列する俗人のため或は又村の集會の

ために使用せしむる場合もあつた。例へば一九〇一年にH・クーランヌの發見せるテール（ハイダラバードのナルドルング地方に在り）の制多堂はその適例であるが、後陣中に安置された制多その



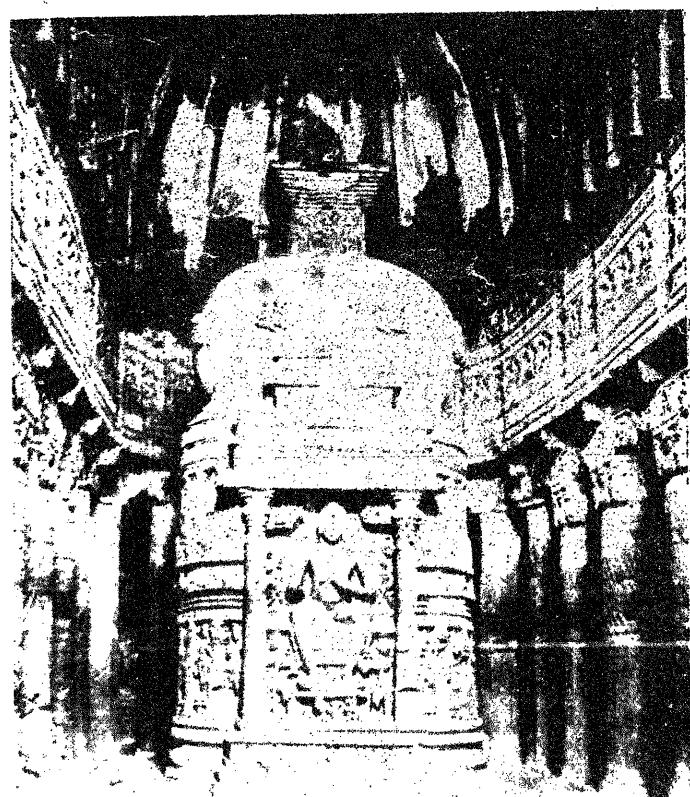
第十窟 制多堂 アジヤンタ窟 第六圖

ものは此の堂が波羅門教徒の手に移つてから取り除かれ、ビシニヌとトリゼグラマの像がこれに置き代へられたと云ふ。現存制多の最古のものゝ一

つはアジンタ岩窟に於て見られる。こゝには岩窟中に作られた四つの制多堂があり、その中の第十制多堂が最古（紀元前一〇〇年頃と推定さる）のものである。この堂は奥行九六呎六吋、間口四一呎三吋、高さ三六呎あり、身廊は柱頭も柱脚もなき頗る素朴な八角石柱左右三十九本づゝに依て袖廊^{アーチル}から區劃されてゐる。堂中奉安の制多も亦頗る簡単なもので何の裝飾もなく只圓筒形の高い基壇の上に深い半球形の覆鉢を設けその上に方形平頭と更に盤蓋とを重ねて置いたに過ぎない。これに反して第六世紀にはじまり七世紀に完成された第二十六窟内の制多は非常に高い圓筒形の基壇を持ち、然もこの基壇の正面には獅子の彫刻ある玉座に座した大きな佛像が刻まつてゐる。覆鉢は鞠毬を上下から壓したやうな稍々扁平な球體で、それから上の部分は第十制多堂

のものと大體類似してゐる。これらの制多は何れも舍利塔の模型の如きものであつて只形式だけをスッペー・バに似せたに過ぎなかつた。

現存印度制多の中最も注意すべきはカールリー岩窟制多堂内に安置されたものである。ボンベイとプーナとの間の地に位するこの岩窟は阿育王時代既に開鑿が開始され、その制多堂は紀元前一世紀頃に作られたものと推定されてゐる。堂内後陣の中央に安置された制多は上下二段の圓形洞の基壇を高く築き、その上に半球體の覆鉢を置き、更に平頭及び木造の盤蓋を以て頂上を飾つたものである。この木造盤蓋は多少破損せるも約二千年前の極めて珍らしきものたると同時に、スッペー・バの盤蓋が木造であつた最も古き時代の様子を偲ばしめるものとして洵に貴重な資料である。尙ほ上下二段の基壇の頭部には夫々欄楯が設けられてゐてサンチーの大スッペー・バを連想せ



第七圖 アジャンタ第二十六窟制多

しめる。この制多はアジャンタ第十窟内の制多と共に最も原始的にして單純な様式を示し、アジャンタ第十九及び第二十六窟内の制多の如き中世紀の複雜裝飾化せる制多と著しき對比を爲してゐる。なほオーランガーバード第四窟、カンヘトリーア第三窟、バージャー第十二窟、バーグ第四窟などの内部に遺存する制多は何れもカールリーのも

のと同様に比較的單純素朴の様式を示してゐる。

又バージャーには一窟内に十四基の制多群を設けたものがあると云ふが、これなどは全く異例と云ふべきであらう。

制多堂はサンチーにもあつた。けれどもそれは古き以前に破壊されて僅かに基礎の部分と倒れか

つた數基の列柱とを残したのみであつたから、

復原後の今日でも淋しく立つギリシャ風の石柱群が見られるだけである。然もこれらの石柱は僅少の壁面殘部と共に七世紀頃のもので比較的に新しい。但じ堂の床下に殘る極めて古き土臺だけは恐らく制多堂が木造であつた時代にその基礎を爲して居たものであらうと推定されて居る。

以上は制多堂及びその中に奉安された制多の實例少數に就いての略述であるが、之を要するに制多は本來スッペーと同様に舍利奉安の墳墓であつたが後には全く舍利を含まず然も制多堂の本尊と

して後陣に安置禮拜せられるに至つたのである。從て屋外の露塔とは異り制多堂そのものの構造に制約されて比較的に小さく且つ禮拜に適するやうに作られたのであつた。

四、錫崙のダーガバ

(イ) 錫崙の住民と宗教

錫崙島が今日のやうに完全に英國の支配下に置かれるやうになつたのは一八一五年以後のことであつた。それ以前には一五〇五年に始めてこの島に渡來せしポルトガル人、次いで約百年の後に上陸せしオランダ人が夫々相前後して政廳を置き勢力を振つたのであつた。今でも土着民にして基督教を奉ずるホルトゲス及びダチューと稱せられるものはこれら第十六、七世紀に移住したポルトガ

ル人及びオランダ人の子孫である。乍然この島の最も古き原住民はヴェダ族であつた。彼等は古く

他の種族のために征服せられ今日では人口甚しく減少し、僅にその一部がキヤンディの東方に當る

るからである。

深山幽谷に隠れて文明世界と杜絶せる原始生活を營み、他の一部は侵入異種族と混血して島内最下層の階級を作つてゐる。之に反して紀元前五世紀頃印度ガンヂス河流域地方よりこの島に侵入してヴェーダ族を征服したアーリア及びドラヴィダ兩系の混種たるシンハリーズ（獅子族）はアナラジヤー・プラを首府として大なる發展を遂げ、後に南印度より侵入せるタミール族と抗争しつゝもよくその勢力を維持して今日に至り、現在なほ全島住民の約三分の二を占めて居る。錫峯の佛教塔婆に就いて考察を加へんとする者は先づこの獅子族の如何なるものなるかを知つて置かなければならぬ。何故ならばこの島に土着する九種の諸異族中佛教を奉するのは獅子族のみであり且つ佛教をして今尙ほ錫峯の主要宗教たらしめてゐるのも彼等であ

印度に發祥した佛教が如何にして錫峯に渡來し且つこの島に於て榮えたかの沿革を記述せる史典として貴重なるものが二つある。その一は紀元四〇〇年頃の編纂たる提婆洹婆（Dipavansa）、他は五世紀の後半頃國王ダートゥウセーナの伯父にして高僧たりしマハーナーマ（大名尊者）の纂輯せる摩訶洹婆（Mahavamsa）である。先づこゝではマハーヴィンサ（大史又は大統史の意）第六章により獅子國に關する傳説を略述して見やう。

昔印度にカリンガと云ふ國（今のマドラスの西北）があり、その國王カリングーの王女はヴァンガ國（今のベンゴール）の王ワングの妃となり一女を擧げた。然るにこの女は天性頗る放縱、長するに及ぶも自家に安住せず處定めず放浪客遊するを常とした。或日女は偶々マガンデ國へ赴く一商人に邂逅しそのまゝ相携へて自國を去つた。兩人が

道を急ぎつゝラーラ國の曠野に差掛るや突然一頭の獅子が現れて女を捕へ深山に攫つて行つた。その後女は獅子と俱に棲みやがてシーサバーフ及びシーサバーヴリーと名づくる一男一女を生んだ。

然るにシーサバーフは盛年に達してその肉身の妹自ら國王としてラーラ曠野の中央に一城を築いた。その後シーサバーヴリーは雙生兒を擧ぐること十六度、合計三十二人の子を産んで益々榮えたがその長子毘闍耶^{ヴィジエヤ}は佛滅の年に七百の部下勇士を率ゐて錫崙島に渡つた。彼は佛勅を受けたウブルワン天に守護せられ、又クウェニーの神に助けられて錫崙に住する一切の悪鬼を伐ち從へ島を新に僧訶羅^{シングラ}國と名づけて之に君臨するに至つた。

以上マハー・ヴァンサに記された傳説は提婆洹婆第九章にもあり、又他にも種々の表現を以て傳へられてゐる。例へば大唐西域記第十一卷、僧伽羅

國の篇の如きはその敍述頗る詳しく且つ面白い。

何れにしても自ら獅子の子孫と呼べるシンハリーズは紀元前五世紀頃錫崙島に渡り、爾來幾多の變遷を経つゝも島内の主要住民として一大勢力を爲すに至つたのである。アラビヤ語の sarandib、ボルトガル語の Ceilao、英語の Ceylon は何れも Sinhalas 卽ち獅子族なる名稱の轉訛である。而してシンハリーズの言語は梵語と巴梨語との混じたもので彼等が印度アーリア系の種族に屬すること、又佛教の影響を著しく受けてゐることはその言語によつても知られるのである。

佛教の獅子國への渡來は阿育王の王子摩哂陀^{マヒンダ}が王命を受けて同國へ赴き傳道せしに始まる傳へられてゐる。從てこれが事實とすれば大體紀元前二四六年頃のことになる。摩哂陀が風に乗りて獅子國に來り、はじめて降臨したと云ふミヒンター・レ山は古都アナラジャトプラの東八哩の地點に在

り、附近には摩晒陀の舍利を奉安したと稱せられるアムバスター・ダーガバが現存して居り、佛陀の白毫（mūla）を埋藏すると傳へられるマハ・セーヤのダーガバと共に土民の尊崇する所となつてゐる。摩晒陀の布教は忽ち大なる效果を挙げ、それまで姪祀を宗としてゐた獅子族は國王をはじめ一般民衆に至るまで熱心な佛教徒と化し遂には後世唐の玄奘が「伽藍は數百處ありて僧徒は二萬餘あり、王宮の側には佛牙の精舍あり、高さ數百尺、瑩くに殊珍を以てし、之を飾るに奇寶を以てせり。精舍の上には表柱を建て鉢曇摩羅伽大寶を置く、寶光赫奕として暉を聯ねて照り曜き、晝に夜に遠くより望めば爛として明星の如く、王は佛牙を以て日に三度び灌ぎ洗ふ。香水香末或は濯ぎ或は焚き務めて珍奇を極めて以て供養せり」（西域記、第十二）と傳へたやうな佛教の繁榮を來たしたのである。殊に佛教がその發祥地たる中部印度に

於て全く衰微して了つた頃にも錫峯ではボロンナ、ルア時代から更にキャンディ時代に及んでも衰へることなく、今日尙ほ島内宗教の最高位を占める事は注目に値する現象である。

シンハリーズに次いで錫峯に侵入した種族は南印度より來れるタミール族であつた。タミール族はシンハリーズを壓迫して之と勢力を爭ひつゝ今日に至つてゐる。その人口は島内全住民の約四分の一を占めてゐるが宗教は婆羅門教、言語はタミール語であるためシンハリーズと融合同化することは甚だ困難である。島内にはなほ回教を奉ずる少數のアラビヤ人があり、又マレー人、チャフロ人、ロデイアス人などが土着民として混在してゐるが、これらは何れも微々たる存在に過ぎない。

寧ろ現今では上流社會を構成し政治上經濟上の優越權を享受してゐる英國人その他の純粹歐洲人こそはシンハリーズにとつて最も恐るべき敵なので

はあるまい。

(ロ) ダーガバの形狀と種類

錫峯では塔婆のことをダーガバと呼ぶ。ダーガバとは本來佛の身界即ち舍利を意味する梵語の *stupa* と、胎即ち舍利を藏する處を意味する *gha*。*stupa* との結合せるダーツ・ガルバに發した名辭である (アーガスン、前掲、上巻、五四頁、逸見氏、前掲、二七頁、参照)。而して現在錫峯のダーガバとして遺存するものは大體印度の古制スツーパと同様に覆鉢形である。この覆鉢形塔婆形式は土饅頭式圓塚の發展と見るべきであらうが、これに就いて次の如き傳説もある。即ち西域記 (卷第一、縛喝の項) によれば昔如來はじめて佛果を證し、菩提樹より起ち給ひて方に鹿野園に詣で給はんとした時、その威光に驚きし二人の長者が行路の資として麁密を獻じた。世尊はそこで人天の福を説き、五戒十善を語り聞かせた。次いで二長者は供養すべき所のもの

を請ふた。如來は遂に髪爪を二人に授け、禮拜の儀式として次の如く教へ給ふた。先づ僧伽胝 (大衣) を疊んで下に敷き、次に鬱多羅傳 (上衣)、次に傳却崎 (覆腋衣) を敷き、その上に鉢を覆せ、錫杖を立て、是の如く次第して窣観波となすと。

二長者命を承けて各々その城に歸り儀を聖旨に擬して式に崇建を修した。これ即ち釋迦の法の中に於ける最初のスツーパであると云ふ。勿論これは一個の傳説に過ぎないが、兎も角錫峯のダーガバが何れも先づ袈裟を敷き、次に鐵鉢を覆せ、その上に錫杖を立てたやうな形狀を示してゐるのは興味深い。

錫峯に於ける現存最古のダーガバはキャンディの北方八十九哩のアナラジャープラに在る。この地は紀元前四三七年から紀元七五〇年まで獅子國の首都として、又佛教の中心地として榮えた本島最古の都會であつた。乍然その後シンハツーズが

タミール族のために壓迫されて南東六十五哩のボロンナルワへ遷都して以來この古き佛教の都は全く衰へ、嘗ては豪侈を誇りし伽藍や堂塔も或は破壊され或は荒廢して徒らに蔓草や雜草木の覆ふ所となり附近は到る處藪地と化して了つた。斯くの如く久しきに亘つて鳥獸の外棲み得ざるが如き荒地となつて居たアナラジャーブラも近世に及んで漸く開發せられ、殊に此の島が英領となつてからは著しき發展を遂げ今日では北中部錫崙の首都として、又交通の要地として重視せられるやうになつた。然もこの更新された都市及びその附近は大小數基の古きダーガバをはじめ數々の佛教古建造物遺跡の存す所として佛教考古學及び藝術史方面の學者や好事家を誘引して居る。

伊東忠太博士（建築文獻、東洋建築の研究、下巻、四七五頁）は嘗て錫崙のダーガバに二つの類型を區別され、一を小塔、他を大塔と稱せられた。博士の所

謂小塔は直徑數十尺に過ぎず、基壇は割合に高く塔身は半橢圓形を立てたやうな形を爲し、平頭は比較的に顯著なるも相輪は急に細まつて筍形をなすものである。又所謂大塔は大伽藍の中心を爲す塔で、直徑數百尺に及ぶものあり、基壇割合に低く、塔身は殆ど半球體を爲し、平頭は鮮明なる四角の輪廓を示し、相輪は上部の細まつた圓筒形を爲すものである。次に同博士のこの區分に基き小塔及び大塔の實例を求めて見やう。

アナラジャーブラに於て、從て又錫崙全島に於て最古のダーガバはツーパートラーマの塔婆である。この塔婆を一八四二年に行はれた修理以前の圖（ファークスン、前掲、上巻、一三〇圖、參照）で見ると

平頭も相輪もなく全く荒れ果てた土饅頭式古墳としか思へない。これに反して最近の寫眞によると白堊の新しき外裝で包まれた鐘形の覆鉢、大きなか方形平頭、金屬製の先端を持つ太い筍形の相輪な

どが整えられてゐて、これが果して錫峯最古の塔婆の正確なる復原と云へるであらうかと疑はしめるものがある。G・E・ミットン（錫峯の亡都、八五〇）によればこの塔婆は佛の鑽骨を奉安せるものとして尊重せられ、現在（一九一六年）では敷石から相輪先端までが六三呎、覆鉢基底部の直徑が四〇呎六吋であると云ふから伊東博士の所謂小塔に屬するものである。

マハーランカ（平松友嗣譯註、第十七章、參照）の傳へる所によればこのダーガバは國王天愛帝須（Devanampissa Tissa 紀元前三〇七—二六七年）が阿育王より贈られた佛舍利を收むべく建立したもので、愈々聖骨奉安の當日となるや王は城を擧げて恰も帝釋の苑の如く之を莊嚴し、自らは王者の服に威容を正し群衆を率ゐて塔前に進んだ。然るにこの時佛舍利は忽ち天空に揚り、佛陀が舍衛城健陀菴羅樹に於て示顯し給ふたと同様の奇跡を現し



第八圖 ランカーラーマのダーガバ

俱に出家して羅漢果を得、同様にして王城内外三萬の人々も出家し、更に佛舍利を安置せし處に一

た後空より降り王の頭上に止まつた。こゝに於て王は歎呼してこれを塔中に收めたが、奉安し終るや否や大

地震動し

て天より

甘露を雨

し、人天

等しく姿

度を唱へ

た。この

神變を拜

した王の

弟末多婆

耶は一千

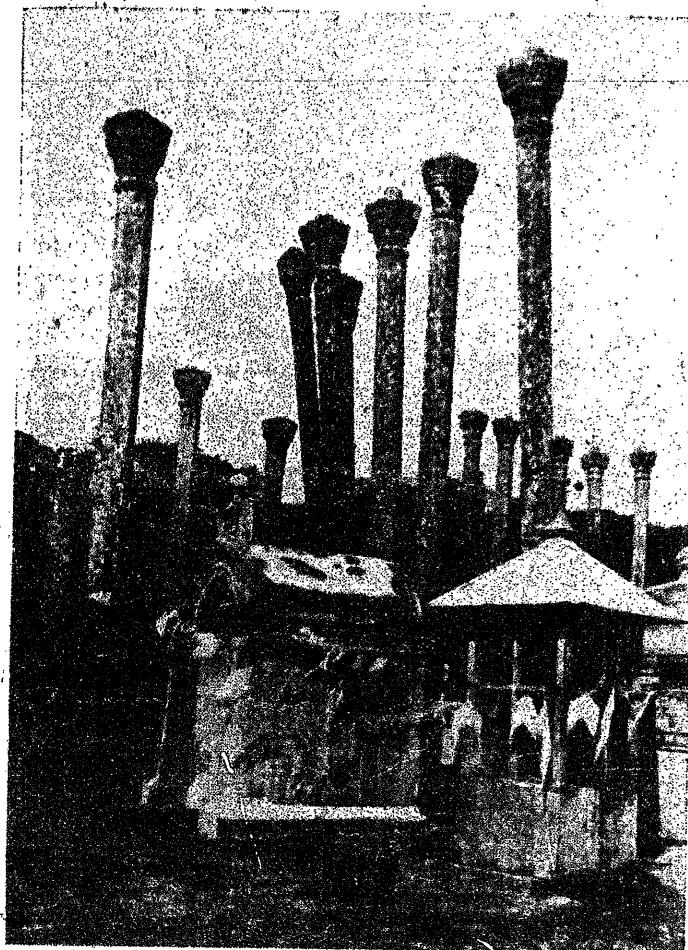
の人々と

つの精舎を建てたと云ふ。

小塔の實例としてはなほ先に述べたアムバスター及びマハーラーヤの兩塔、又久しく荒廢して殆ど崩解に瀕せしも近時漸く修理復原されたランカーラートマのダーガバがある。この塔の來歴は不詳であるが聖菩提樹、銅殿、三大ダーガバ及びツーパーラーマ小塔などと共にアナラジャープラニ於ける最も神聖なる遺跡の一つである。これら的小塔に就いて特に注意すべきはその周圍を同心圓的に圍繞する數列の石柱列である。この石柱列は四つの同心圓をなして塔を圍むもの（例、ツーバーラーマ塔）もあれば三つ（例、ランカーラーマ塔）又は二つ（例、アムバスター拉塔）の同心圓を作つて居るものもあつて、必ずしも一定して居ない。ツーパーラーマ塔に於ては覆鉢の基部から約三呪離れて一番内側の列柱が立ち並び、又これと同心圓的に林立せる第二、第三、第四の列柱

が夫々内側のものより一〇呪づゝ後退してダーガバを圍繞してゐる。而して最外側の列柱はその數四十八本、他の内側のものは合せて百二十八本、即ち全體で百七十六本あつた筈であるが今はその中四十二本を缺いて居る。最内側の列柱は最も高く夫々二二呪一〇吋あり、それより外側のものは高さを減じ、最外側のものは柱頭をも合せて一四呪しかない。石柱は何れも單體石で下部は各面幅一呪位の四角柱を爲し、それから上は八角柱となつて漸次に細まり、先端は種々の浮彫のある八角柱頭を以て飾られてゐる。これらの石柱群はツーパーラーマ塔以外のダーガバに於ても略々同様の形式及び裝飾を持ち、世界の諸佛塔中錫崙のダーガバ以外に例を見ざる特殊の存在である。然もこの珍らしき存在たる石柱列の用途に就いては學者間に種々の説が唱へられ未だ十分に満足し得べき定説は成立してゐない。石柱の先端に柄の造り

出しのある所から、列柱は隨時材木製の梁を架渡したものだらうとの推測は伊東博士（前掲、一五四頁）やフォーダー（前掲、七八頁）の著書にも見られ、更に伊東博士は梁の上に布を張つて日光を遮断するためにこの石柱列が使用されたのだらうとも云はれた。然るにウイーン大學のエルンスト・ディエツ（印度の藝術、一五四頁）はファーガスン（前掲、上巻）



第九圖 ツーパーラーマ塔周園の石柱列

（二三七頁）と同様にこれらの石柱を以て宗教上の象徴及び裝飾物を戴せるものたると同時に参詣者がダーガバの周圍を巡回禮拜する場合の繞道を區劃するためのものであつたと見做した。もしこれが事實であるとすれば錫崙ダーガバの周圍を同心圓的に囲む列柱は印度古制スッーパに於ける欄楯に相當する役目を果したものと考へられるのである。

(ハ) 大塔

次に伊東博士の所謂大塔の實例としてはデニタヴァナーラーマ、アバーヤギリ、ルワンウェリ、ミリサヴニーチャの諸塔婆が擧げられる。

デニタヴァナーラーマ塔（祇園塔）

ツーパーラーマ塔の北方約一哩にはジニタヴァナーラーマ塔、又東南方約半哩の地點にはアバーヤギリ塔が夫々山の如くに高く聳えてゐる。支那では前者を祇園塔、後者を無畏山塔と

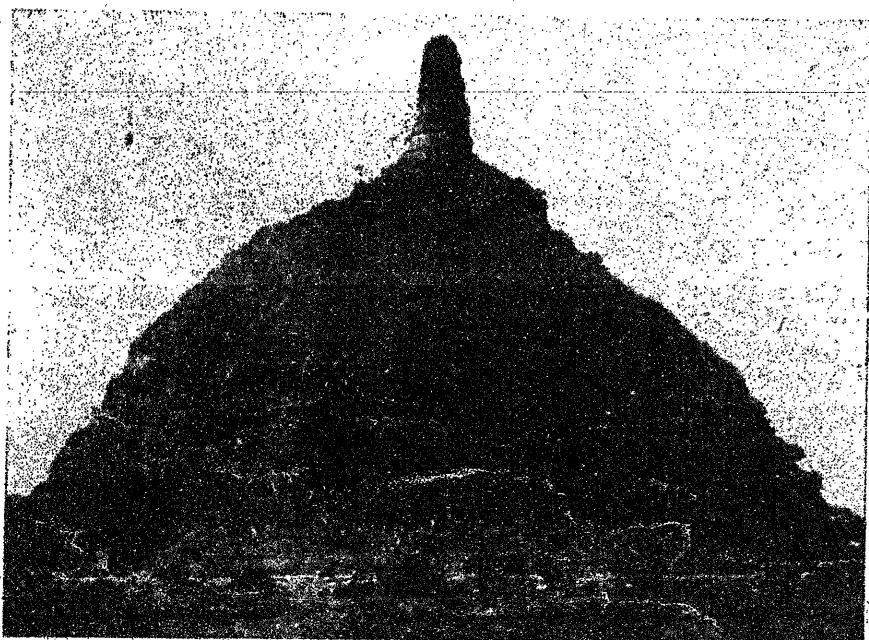
稱したのであるが、第十二世紀の頃から兩者の名稱があべこべに使用されるやうになりそのまゝ今日に至つてゐる（ミットン、前掲、九九頁以下、参照）。從てこの混同を避けるためには北塔及び東塔なる通稱を用ゐるのが適當である。昔の所謂無畏山塔（アバーヤギリ塔）が實は今日の祇園塔（ヂニタヴアナーラーマ塔）に相當したものであることは高僧法顯傳、師子國の條に「佛其國に至り惡龍を化せんと欲し神足の力を以て一足は王城の北を躡み、一足は山頂を躡み給ふ。兩跡相去ること十五由延なり。王は城北の跡上に於て大塔を起せり。高さ四十丈、金銀にて莊校し、衆寶にて合成せり。塔の邊に復た一の僧伽籃を起し無畏山と名づく」とあるを見ても明かであり、從て無畏山塔は今日の北塔でなければならないのである。乍然現實の此の轉用は容易に改め難いので一般にはあべこべの稱呼が依然として行はれてゐる。尙ほミットン

（前掲、一〇六頁）はマハー・ヴァンサの記事を根據として現在の祇園塔の初建を紀元前八八年と推定し、又當時銅殿を中心として勢力を振ひし僧團から分離し之と抗争した他の一派の僧團がこの塔を建立したのであらうと主張した。塔はいつの頃からか荒廢して今では僅に相輪にのみ塔婆の名残を留め、全體としては雜草木の密生せる山としか思へない。最初の高さは四五〇呎あつたと云ふが、今日では相輪を合せて二九四呎、又覆鉢の直徑は三一〇呎あると云ふ。實に昔法顯をして高さ四十丈と驚嘆せしめた大塔である。天沼俊一博士は大正十二年一月にアナラジャープラを訪ひ、この塔を見て「何しろこゝでは一番大きくて形も一番よく、大きな漏斗を伏せた様な形である。そばで見ても立派だし、遠くからパサワク湖を隔てて眺めたところなどは他に比べものがない位によろしい」（同博士著、印度紀行記、五三二頁）と推奨された。

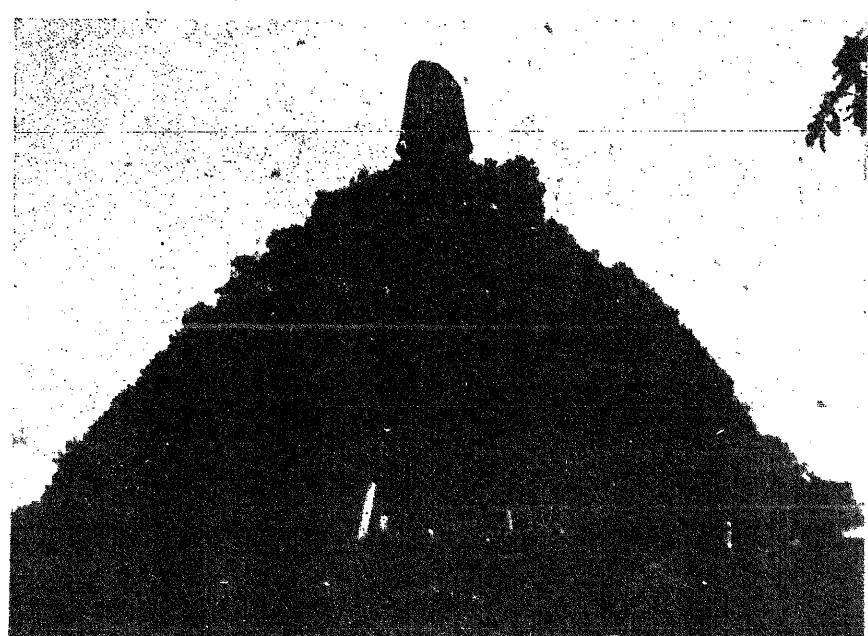
アバトヤギリ塔（無畏山塔）

アナラジャープラの東塔、即ち現在アバトヤギリ・ダーガバと稱せられる塔婆は紀元二七五年から二十七年間獅子國を支配したマハー・セナ王（マハー・ヴァンサ、三七ノ一、參照）によつて着手せらる更に次代の國王によつて完成されたものであるから大塔としては年代の最も新しいものである。從

て阿婆耶王がギリの園に建立したからアバトヤギリの名を得たと爲す（マハー・ヴァンサ、三八ノ八三）塔はこの塔を指したのではなく現在祇園塔と



第一〇圖 アナラジャープラの北塔



第一一圖 アナラジャープラの東塔

呼ばれてゐる北塔のことであつた。伊東博士（前掲一五三頁）の實測では平頭が七九尺四寸四分、相輪下部の直徑四六尺六寸とあるから、それだけでも驚くべき巨大なものであり、又半ば折れた相輪の

折れ口から地上までは二三二尺あつたと云ふ。又

天沼博士（前掲、五三〇頁）の引用された各塔比較表によれば覆鉢の直徑三二五呎となつてゐて、恐らく世界最大の塔婆であつたと思はれる。ディエツ（前掲、一五四頁）がこれをタイ國ペグーのシューーモードート塔、羅馬聖ピエトロ寺の大球蓋、さてはクーフーの大ピラミッドにさへ比して規模の如何に大なるかを稱したのも無理はない。

ルワンウェリ塔

規模の大きさに於て祇園塔及び無畏山塔に劣るも年代の古き點で前二者を凌ぐルワンウェリ・ダー・ガバはツーパーラーマ塔の南方四分の一哩ばかりの所に在る。この塔に就いてはマハー・ヴァンサに極めて詳細なる説明があり、殊に大塔建立の材料獲得（二八章）、大塔工事着手（二九章）、遺骨堂の建立（三〇章）、及び遺骨の奉安（三一章）を敍述した各章には神祕的な信仰に基く架空の言もある

が、事實として首肯し得る點も少くない。

紀元前百年頃陀眉羅族の侵入者エラーラを征服して獅子國の全領土と王位とを回復したドウタガーマニ王は自己の輝かしき勝利の反面にエラーラをはじめ無數の敵を殺戮せし罪業深きを憶ふて心楽しまざるものがあつた。然るに王はこの島の教化者たりし長老が百三十六年前の先王に向つて「卿の子孫にして大智慧者たるドウタガーマニ王は將來に於て高さ百二十肘の快い大塔ソンナマーリーを建立するであらう。又種々の寶石で莊嚴せられた九階の布薩堂を建立し、銅殿をも建立するであらう」（平松譯、前掲、二四七頁）と豫言せしを記録によつて發見し、大に悦び早速この豫言を實現せんがため多數堂塔の建築にとりかゝつた。この豫言中ソンナマーリーとあるのは黃金の華蔓を有するの意であつて王の建立すべき大塔の金色眩きまでに莊嚴さるべきを述べたものである。ルワンウ

エリ塔は實に王が豫言實現のために着手した塔婆であつてマハーヴンサ中に Mahathupa (大塔)と稱するものに相當し、これを英語で Gold-dust Daigaba (金粉塔) と呼ぶのは黃金の華蔓で輝ける塔来形容したものと思はれる。

さて大塔建立に當り王の先づ心配したのは如何にして材料を獲得するか、又人民に負擔をかけず、然も職人に對して十分に報酬を與へるには如何にすべきかの問題であつた。けれども王のこの慈悲心を知つた帝釋その他の諸天は忽ちの中に一切の材料を提供して王の心配を解消せしめた。斯くて準備完了するや王は先づ塔處を固めるために土を七肘の深さに掘らしめ、そこに石塊を運び、革で足を結んだ多數の大象に踏ましめた。次いでこの石床の上には粘土をひろげ、煉瓦を置き、粗い膠灰、朱砂、鐵鋼、香土などを順次に重ね更に水晶の床を設けてその上に石をひろげさせた。王は又

香水に溶解したカピッタ樹の樹脂を以て石の上に厚さ八肘の銅板を置き、その上に胡麻油を以て溶かした砒素を以て厚さ七肘の銀板を置かしめた。

王は大塔建立の場所にかかる準備を行つてから獅子國は勿論遠く印度各地からも十萬に及ぶ多數の僧侶を招待し大塔の定礎式を擧げんとした。然るにこの式に列した悉達多と稱する大長老は塔の規模過大なるを知り王に向つて「若し王がこのやうな大塔を建立するならば塔の竣工を終らずして歿するであらう。又かゝる大塔は修理にも困難である」と忠告した。この時王はよく大長老の忠告を容れて塔の規模を縮小し設計を變へて定礎の煉瓦を据えさせた。その後王は七日間に亘り塔の周圍十八箇所に設けられた講堂で僧達のための大布施を行つた後太鼓を打つて煉瓦工約五百人を集めさせた。王はこれらの煉瓦工に塔建立の方法に就いての意見を求めた。多くの提案の中王は漆喰の

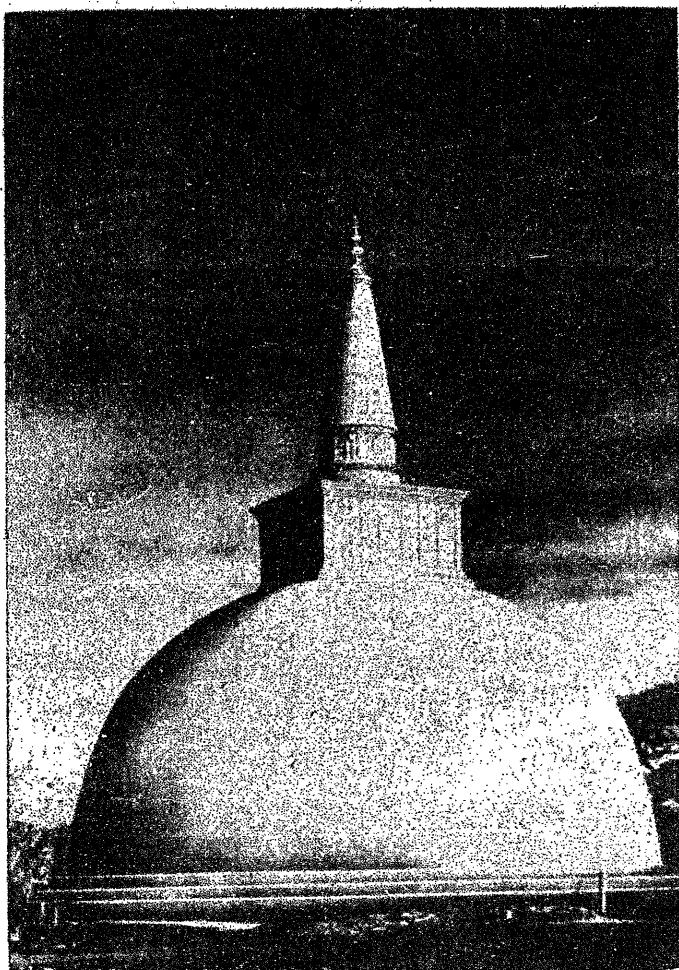
中に砂を搗き碎き、篩ひ籠で分けたものを石臼で粉粹して一アムマナ（容積を表す語）の砂を用ゐるべしと答へた一職人の言を容れ、「かくすれば吾の塔の底には草など生えないであらう」と考へて之を採用した。王は又この職人に「汝はその塔を如何なる形に造らんとするか」と尋ねた。職人は直に黄金の瓶に水を充たし、手でその水をしやくつて水面に落し水晶の如き大きな水泡を生ぜしめた。職人はこの水泡を指して塔を斯くの如き形に作らんと答へた。王は大に悦びこの職人の意見を許した。

やがて大塔にとり最も重要な遺骨堂の工事が開始された。堂は塔の中央に設備せられ、その上方に大覆鉢が築かれる筈であった。他方王は又もと羅摩村の拘利族に保持せられ後龍界に齋らされたと云ふ佛骨一片を得て、これを遺骨堂に奉安することとなつた。中央に寶石造りの菩提樹、周

圍に多くの輝かしき佛像を安置して飾つた黄金造りの遺骨堂の寶座に遺骨函を收めた後、王は更に一般の人々にも夫々自家の遺骨をこの寶座の上部に設けられた場所に納めることを許したのでその數一千に達したと云ふ。かくて王はその凡てを掩ひ塔を完成せしめんとした。然るに塔の天蓋や漆喰工事の完了に先立ち王は大病に患り、塔の竣工を弟サッダー・ティッサに託してこの世を去つた。サッダー・ティッサは王の歿後位を繼ぎ又先王の命に應じて大塔の天蓋を設け漆喰工事を終へ、更に土留のための象壁を作つて一切を完成した。

以上はマハー・ヴァンサ中に述べられたルワンウエリ大塔建立に就いての記事の概略である。この塔はその後の諸王によつても度々莊嚴せられたが第十三世紀には佛教を敵視せる異族のために最も甚しき掠奪的破壊を蒙り、爾來久しく荒廢せるまゝになつてゐたのである。一九〇八年にH・H・

ケーヴの著した「錫峯の書」にはやゝ修理整備工事の進んだときの興味深き寫真五葉が掲げられてゐるが、最近の寫真で見るにルワンウェリ大塔は全然新しきものになつて由緒ある古塔の佛は到底



第一二圖 大塔の現状 ルワンウェリ

ケーヴの著した「錫峯の書」にはやゝ修理整備工事の進んだときの興味深き寫真五葉が掲げられてゐるが、最近の寫真で見るにルワンウェリ大塔は全然新しきものになつて由緒ある古塔の佛は到底

導されないのは殘念であり、殊にこの嘆きは考古學者にとつて痛切なものがあらうと考へられる。

今茲にケーヴの見學せし當時のルワンウェリ大塔の狀態を略述し以てその舊態の一部を偲ぶと共に錫峯に於ける代表的古塔の特徴を考へることも徒勞ではないであらう。

ケーヴ（前掲、五五〇—五五六頁）によれば彼の視察せし當時のルワンウェリ大塔は約二〇〇呎の高さを有し且つ樹木で被はれた圓錐形の丘の如き觀を呈し、小さな相輪が僅にその頂上に望まれるのであつた。塔の東側には嘗て縦及び横に多數の木造の梁を作つたと思はれる六列の石柱群が平行に並び一種の柱廊玄闕のあつたことを想像せしめ得べさうにもない。洵にフォーゲル（前掲、七五頁）の云ふやうに古遺跡の保存及び修理に當つて宗教的熱情が必ずしも常に良き藝術的趣味によつて指

た。このポルチコを入れると先づ幅約一〇〇呎の石壇が大塔を中心とする敷地全體を圍繞し、更にその内側には約二呎の間隔を置いて立ち並ぶ高さ約

九呪の象の形をした煉瓦造りの土留壁を持つ方形石壇（各邊約五〇〇呪あり）が設けられてゐた。

マハーラ・ヴァンサ（前掲、三〇〇頁）中にサッダー・ティッサの作つたと云ふ象壁とはこの土留壁を指したものと思はれる。而してこの象の形は全身を表したものではなく、頭と前脚とのみを持ち、軸薬したるものではなく、頭と前脚とのみを持ち、軸薬で外装され且つ頸の部分には實物の象牙をそのまま差し込んだ根跡を示す孔が残つてゐた。恐らくこの象は最初四百頭位設けられて方形石壇を支えてゐたのであるが、その大部分は破損又は崩解して居た。

中央に築かれた高さ及び基部の直徑夫々約二七〇呪ある煉瓦造大覆鉢の基礎を爲す上述二段の石壇の中、上段の方形石壇のあちこちに考古學及び美術史の上から見て特に注意すべき様々な彫刻物が配置されてゐた。その中、この大塔の建立者たるドゥターガーマニ王の高さ一〇呪ばかりの立像

の石壇上に設けられた小舎の中に奉安されて居たものであつたが、小舎が獅子國の建築に特有の月形敷石だけを残して壊滅して了つたので、近代の發掘者が覆鉢の周圍に立てならべたのであつた。

立像は何れも白雲石の丸彫でその法衣の襞の表現は極めて美しく、又これらの像の目にはもと寶石が嵌め込まれ、更に衣やその他の部分にも寶石が鏤められたものであつたと云ふ。ケーヴは更に覆鉢を中心としてその周圍の方位基點に一箇所づゝ設けられた聖壇^{オーバルタ}（後述する如くこれを聖壇と見做すべきか否かは疑問であるがケーヴの記述通りこゝでは聖壇として置く）に注意を向けた。彼が見た時四方の聖壇は何れも大破して居たが僅に一箇所だけは附近より發掘された小壁、欄干、繩形、持送などの石材を集め復原されてゐたと云ふ。

又これらの石材には大塔に關する記録や石材寄進

などの事を判讀せしめるシンハリーズ語の刻文が残つて居た。覆鉢の基部には昔巡禮者の右繞三匝せし三段の繞道（幅七呎）があり、その中最上段の繞道の縁には正確な間隔を置いて作られた約百五十頭の座象の丸彫が裝飾として加へられてゐた。覆鉢はこの繞道の上高く無數の煉瓦を以て築かれたものであつたが大部分は雜草木のために隠されて、僅に修理された下部の煉瓦造のみが露出してゐた。

ルワソウエリ大塔に關するケーヴの記述は頗る詳細にして、これを讀みつゝその挿入寫眞を見るならば略々舊時の大塔を偲び得るのであるが、更に又大正十二年に同塔を視察された天沼博士撮影の寫眞（同博士著、前掲、五一九頁以下）や昭和七年尾高鮮之助氏撮影の寫眞（美術研究所編、印度及び南部アジア美術資料、圖版一〇七六一一〇七八）などを比較するならば近時に於ける修理過程も辿ら

れて興味深きものがある。尙特に私の注意を引いたのはケーヴの訪問當時方形石壇上に一基だけ遺存せし小奉納塔（ケーヴ著、前掲、六七七圖、天沼、前掲、五二〇頁、參照）である。これこそはルワソウエリ大塔の雛形とも見らるべきものであつて、實によく錫崙ダーガバの特徴を發揮した一典型である。ケーヴによればこの小塔は方形基壇と共に一個の巨 大な石材を丸彫にして作つたものであると云ふが、その基壇の周圍に象壁を設けた所など甚だ面白い。恐らく佛陀伽耶大塔附近の小奉納塔と同様にルワソウエリ大塔の周圍にも尙ほ多數の小塔が奉納されてゐた事であらうと想像される。

五、錫崙の塔婆と南印度の塔婆

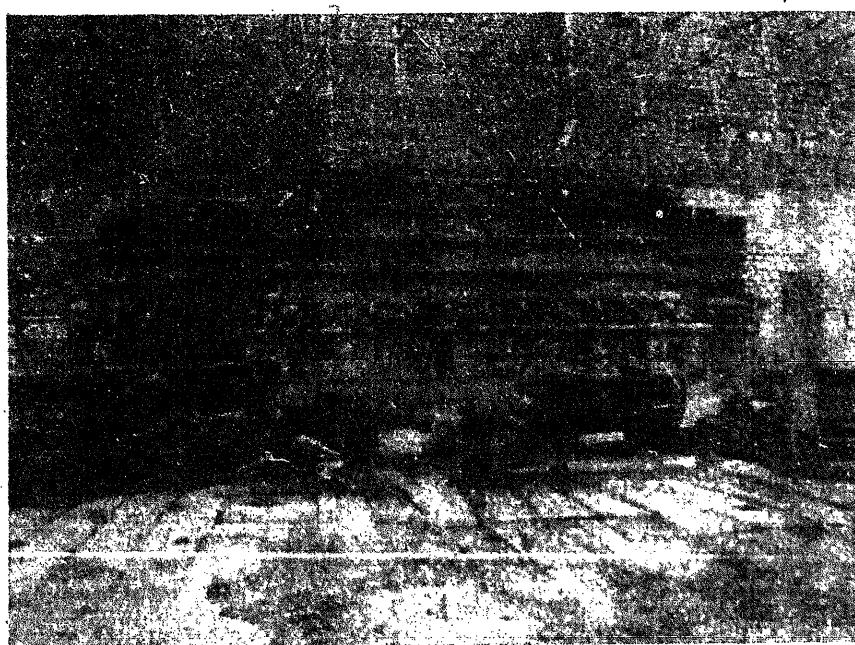
錫崙に於ける最初の塔婆が阿育王より贈られた佛舍利奉安のために建立せられ、又一般にこの島の塔婆様式が大體に於て印度の古制スッーパを踏

襲したものなることは既述の通りである。乍然錫
嵩に遺存する大小幾多の古塔婆を通覽すると、そ
こには又印度のスツーパとは異なる、錫嵩獨特の
部分の發展をも認めざるを得ない。先づ第一に氣
重要視される欄楯と塔門とが共に錫嵩のダーガバ
に缺けてゐる事である。一般に錫嵩のダーガバは
印度のスツーパに比して何となく穀風景な物足り
ない感を起させるが、それは彫刻的要素の母體た
るべき欄楯や塔門の缺如に歸因するのではないか
と思はれる。元來覆鉢形の塔身は單に土饅頭式圓
塚の發展したものであつて變化に乏しく建築的に
も美術的に面白味の少いものである。それ故サ
ンチーの大塔と雖も、若しあの豪華な塔門と欄楯
とを取り去つたならば甚しく物足らぬものとなる
であらう。この意味に於て欄楯無く塔門無き錫嵩
のダーガバ、殊にその巨大なる大塔は如何にも馬

鹿げた間の抜けたやうに見えるのである。けれど
もダーガバのこの弱點を多少とも補ひ、且つ塔門
や欄楯の缺如のために表出されなかつた彫刻的要
求を充足させたものは覆鉢の基部の東西南北の四
方位に側接して設けられた四つの矩形聖壇様の突
出部である。この四方突出部のシンハリーズ語の
名稱は *Vahalkada* であるが西歐の學者はこれを
聖壇(オーネタ)（ケーヴ、前掲、五五四頁）、拜處(チャベル) 又は寶座(スローラン)（ファーガ
スン、前掲、上卷、三三〇頁）、隔障(スクリーン) 又は主眼部(フロンティビース、
ル、前掲、八〇頁）などと譯した。斯くの如く譯語の
一定して居ないのはヴァーハルカダそのものの用
途が明かにされて居ないためであつて、例へば佛
像を安置禮拜した場所であつたと解したり、或は
又覆鉢の周圍に設けられた繞道へ昇る階段を隠す
ための衝立の如きものであつたと見做す人などが
あつて、未だ定説が確立されて居ないからである。
然らばダーガバの外周四方位に設けられたこの

ヴァーハルカダは如何なる様式のものであらうか。これを知るためにには是非とも現存遺物を調べなければならぬが、現在錫菴に在る古代のダーガバにして四つのヴァーハルカダを舊態のまゝ保持するものは一つもなく、何れも大破又は崩解して了つた。その上比較的によく舊態を再現したもののとして研究者の注目してゐたルワンウェリ大塔の復原されたヴァーハルカダ（美術研究所編、前掲、一〇七七圖、ケーヴ、前掲、六七九圖、参照）が最近に於ける同塔の俗惡的新装によつて失はれた今日最もよき標本として参考にし得るのはミリサヴェティヤ大塔のヴァーハルカダのみとなつて了つた。

ミリサヴェティヤ塔はアナラジャープラに遺存せし第四番目の大塔でドウタガーマニ王がルワンウェリ大塔及び銅殿に先立つて建立せしものと傳へられてゐる。この塔婆の起原に就いてミットン（前掲、一一六頁）は次の如き傳説を紹介した。即ち



第一三圖 ルワンウェリ大塔のヴァーハルカダ

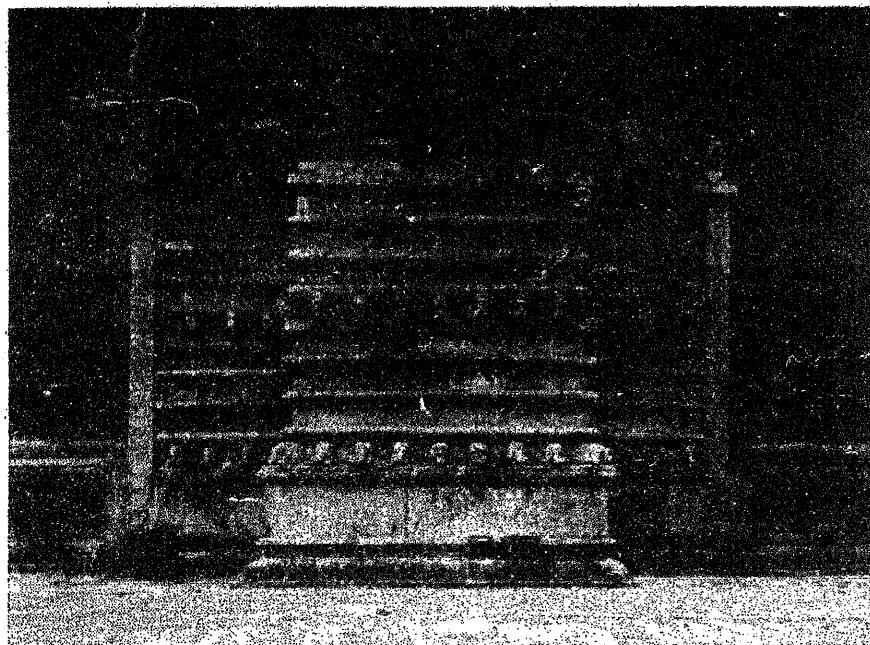
ドウタガーマニ王は何を食べる時でも必ずその一部を僧侶達に分與するのを慣例として居たが、或る日王は

Mirisavetiya と稱せられる一種の蕃椒を以て調味された漬物をうつかり僧侶達に分與することなしに一人で食べ盡して了つた。そこで王はその代償として

立させたのであると。

この塔はアナラジャープラに於ける他の諸塔と同様に甚しく荒廢し、四方位に設けられたヴァーハルカダも土砂中に埋没してゐたのであつたが一八八八年にこの塔を巡視された暹羅國皇太子が佛教古建造物の修理費として寄附された多額の資金を以て修理復原工事が進められたのであつた。けれども古き中核の部分とその周圍に築かれた新しき赤煉瓦の外構との間の空所には澤山の蝙蝠が巣を作り、毎日夕刻、煙の如く或は風に吹き散る木の葉の如くに舞ひ上る無數の蝙蝠の大群を見るのはアナラジャープラに於ける一偉觀である（ミットン、前掲、一一六頁）と述べられてゐるのを見ても當時の不完全なる修理が思ひやられ、又天沼博士（前掲、五二六、五四一頁）が嘗て「その修理にはどんな技術家が關係したか知らぬが、この様な不思議な形にして了つたのは洵に惜しいことである」と

云はれ、且つその不格好な形を見て「恰も虚足と棘とを取り去つた巨大な海膽のやうだ」と揶揄されたのも同塔現狀の如何なるものかを想像する場合の参考となる。さてこの塔の覆鉢は直徑一三三呎あり、その裾をめぐる三段の繞道は夫々五呎乃至六呎の幅を有し、且つ三段合せて高さ一三呎五時であつたと云ふ（ヴァーガス、前掲、上巻、二三一頁）。ヴァーハルカダはこの繞道の外周四箇處に復原せられ、その中西側のものが最も優れてゐる。不格好な覆鉢部に對して海膽塔なる綽名を呈せられた天沼博士（前掲、五四二頁）も流石に西側ヴァーハルカダに對してのみは讃辭を惜まれなかつた。これは前面凸形に張り出した衝立の如き形を爲し、十段に積まれた棚の如き蛇腹が重ねられたものである。蛇腹と蛇腹との間には疾走する動物群を刻んだ小壁や、皿飾と象頭の丸彫とを交互に配した脳かな彫刻があり、更に全體の構造を左右から支え



第一四圖 ミリサヴェチャ大塔のヴァーハルカダ

る二本の石角柱はその全表面に刻まれた唐草模様の浮彫と、先端に大斗を隔てゝ置かれた座獅子の丸彫との故に錫崙美術の研究家により高く評價されて居る。尙この左右兩石柱の外側にも彫刻の施された低

い板石が立つてゐる。

現存遺

物の乏し

きヴァー

ハルカダ

の様式は

上述ミリ

サヴェチャ

大塔西側

の一例に

よつて大體窺ひ知ることが出来たが、次に問題となるのはヴァーハルカダが果して錫崙ダーヴァにのみ存するものなのか、或は又印度の古制スツーパにその模本があつたのかと云ふ事である。先づ現存最古のスツーパの一例たるサンチー大塔を見るに、これにはヴァーハルカダ又はそれに類似するものすら認められない。然るに南印度の北境に位するキストナ河流域地方のアマラヴァチ、ジャガヤペッタ、ナガールジュニコンダ等に存在した古きスツーパには錫崙のヴァーハルカダを聯想せしめるやうな部分が附屬してゐたと考へられる。アマラヴァティのスツーパが發見されたのは一七九七年で、英國のマッケンジー大佐が同年はじめて之を見た時には覆鉢もその下部の胴もそのまゝ遺存して居た由（ファー・ガスン、前掲、上巻、八〇頁）であるが、その後この地方の小會長は新住宅地を得んがために此の土地を選び僅少の代金を以て貴重

なる佛教古建築物を買収して了つた。かくて中央の大スツーパは崩解され、彫刻のある石材や羽目などは容赦なく破壊され、或は又石灰を得るために焼き碎かれたりした。かゝる亂暴なる所置の間にも英國考古學者達は此の地の遺物の價値を認め一七九七年に早くも七個の美しき浮彫のある石材をカルカッタの印度博物館に送り、次いで後には

百六十個の浮彫ある欄楯用石材を英本國に送つた。今日大英博物館内の大階段に沿ふて陳列されてゐる多數の欄楯断片はこの時送られたものであつて、一八八一年にJ・バージスが發掘蒐集し現にマドラス博物館に所蔵されてゐる四百點の彫刻と共にアマラヴァチ大スツーパの研究資料として貴重なるものとなつてゐる。バージスが一八八一年に發掘調査を行つたとき大スツーパは既に崩解されて原形を留めなかつたが、然し直徑約七五ヤードの圓形平土間の存在によつてスツーパの位

置及び規模を推定することが出來た。彼は又此の平土間の東西南北の四方位に夫々矩形突出部のあること、スツーパはもと美しく彫刻された高さ約四ヤードの欄楯を持つ幅四ヤードの繞道によつて圍まれ、更にスツーパの胸部も亦多くの薄浮彫のある大理石の羽目で裝飾されたものなる事などを明かにした。

アマラヴァティで集められた欄楯や羽目の破片中に大スツーパの建てられた當時の塔婆形式及びその裝飾を想像する手掛りとなるやうな浮彫スツーパの刻まれたものが數個あつた。中でも現にマドラス博物館に所蔵されてゐる大理石の羽目に刻まれた浮彫の小スツーパ(フォーゲル、前掲、第十四圖、參照)及び大英博物館所蔵の欄楯破片に刻まれた同様の浮彫小スツーパ(ファークサン、前掲、上巻、第三十圖、參照)の如きは南印度の古制スツーパの典型とも云ふべきものと解せられる。而してこゝで特に

注意すべきはこれら浮彫小スツーパの鐘形覆鉢の外周四方位に夫々一箇處づゝバイプ・オルガンの如き形を爲して立つ五本の柱が見られることがある。この五本の柱はその臺となれる部分を以て繞道を圍む欄楯と連絡し、然も欄楯よりも外へ向つて突き出してゐる。かくてこの突出部こそはバージスがアマラヴァチ大塔の遺趾で發見した矩形突出部を説明する最もよき鍵と考へられるのである。

アマラヴァティ大塔の建立年代は大體第二世紀の後半と推定されてゐる。この推定は同塔に使用された石材中に Andha 王朝 Pulumayi 二世の治世中に作られたことを刻んだものがあつたので證明された(フォーゲル、前掲、四五頁)。然るにアマラヴァティの北西約三〇哩に當る小村ジャガヤペッタに於て三本の石造圓柱が發見されたことがある。この石柱に記されたプラクリット語(梵語系の一

地方語)の刻文によつてこの地には IKkappu 王朝の Suri-Virapunisadatta 王の時代に建立されたスツーパが存在し且つこれらの石柱が *ayaka-kham-bha* と稱せられてそのスツーパに所屬せしものなることが明かにされた。そこでフォーゲル(前掲、四五頁)はこの石柱を以てアマラヴァティ大塔の羽目や欄楯に刻まれた浮彫小スツーパ中の五本の柱と同様にスツーパの四方位に設けられた突出部に立てられたものの一部に相違ないと斷定した。他方又アマラヴァティの少し上流に位するナガールジニコンダに於ても一九二五年には多數の佛教建築物の遺跡が發見され、次いで一九三〇年までの間に英國の考古學者 A · H · ロングバーストは種々探査を行ひ Ikkaku 王朝の王女 Chantisini によつて建立された大スツーパの遺跡を發見した。このスツーパは發見當時僅に基部を殘せるのみであつたが初建時代には六〇呎を下らざる

高さを持ちしものと推定せられ、又現にサルナートの新築毗訶羅^{ビハラ}に移し奉安されたと云ふ（カミング編、前掲、一二五頁）

佛舍利はロングベーストがこの遺跡中より發掘したものであつた。さて此のスツーパの基部を調査した所、こゝにも亦夫々五本の石柱を立てた突出部のありし根跡が明かに認められたのみならず、その後の復原に際して新しき突

出部が設けられたと云ふことである。



第一五圖 アマラヴァティ大塔基部の
浮彫小スツーパ

以上の諸事實により南印度の古塔婆に五本の石柱を立てた突出部が存在せし事、又それが *ayaka-khampha* と云ふ名稱のものであつた事が明かにされた。然るに他方錫崙のアバーヤギリ大塔の南側ヴァーハルカダの遺趾から、同塔の四つの *stupa* がマール・ティッサ王（マバー・ヴァンサ第卅章の六にはカニッタ・ティッサ王と呼ばれて居り、紀元二三〇年頃の王であつた）の命によつて建設された由の刻文ある石材が發見されてゐる。フォーゲル（前掲、八一頁）はそこでこの刻文中の *ayaka* なる語はヴァーハルカダを指すものであり、更にそれは印度キストナ河地方の古塔婆に於ける *ayakha-khommbha* に相當するものであるから、結局錫崙ダーガバのヴァーハルカダの模本は南印

柱と云ふ名稱のものであつた事が明かにされた。然るに他方錫崙のアバーヤギリ大塔の南側ヴァーハルカダの遺趾から、同塔の四つの *stupa* がマール・ティッサ王（マバー・ヴァンサ第卅章の六にはカニッタ・ティッサ王と呼ばれて居り、紀元二三〇年頃の王であつた）の命によつて建設された由の刻文ある石材が發見されてゐる。フォーゲル（前掲、八一頁）はそこでこの刻文中の *ayaka* なる語はヴァーハルカダを指すものであり、更にそれは印度キストナ河地方の古塔婆に於ける *ayakha-khommbha* に相當するものであるから、結局錫崙ダーガバのヴァーハルカダの模本は南印

度の古制スッーパに求むべきであると主張した。

フォーゲルの右の如き主張は今日多くの學者の肯定する所で先づ妥當であらうと思はれるが、こゝで想起すべきは摩訶僧祇律（第三十三）に於ける造塔法に關する次の文章である。即ち「塔を造る法は下基の四方に欄楯を周匝し、圓く起すこと

二重、方牙四本、上に盤蓋、長表、相輪を施す」。

逸見氏（前掲、五三頁）はこの文中にある方牙四本な

る文句に注目せられ、これを以てアマラヴァティ欄楯彫刻スッーパの覆鉢下部四方に五本づゝ立てられた石柱を指すものと認め、且つ方牙四本を「方

柱四方に立つ」の意味に解釋せられた。こゝで云ふ方牙は勿論角柱の意味であらうが南印度のスッ

ーパに於ける *ayaka-khamba* の五本の柱は必ず

しも角柱のみではなく圓柱の用ゐられし事のあつたのは前述の遺物によつても證明されてゐる。從つて方牙四本とあつてもそれを角柱でなければな

らぬと解する必要はないと思ふ。何れにしても摩訶僧祇律の中に南印度のスッーパ及び錫器のダーガバに特有なる矩形突出部存在の文獻的典據の求められることは甚だ興味深いものと云はなければならぬ。

使 用 文 獻

- 一、高僧法顯傳（國譯一切經、史傳部、十六）昭和十一年
- 二、大唐西域記（同上）
- 三、佛說長阿含經（同上、阿含部、七）昭和四年
- 四、四分律（同上、律部、一一三）昭和四年
- 五、摩訶僧祇律（同上、律部、八）昭和四年
- 六、小野玄妙、佛教美術概論 大正六年
- 七、松本文三郎、印度の佛教美術 大正十二年再版
- 八、逸見梅榮、印度佛教美術考、建築編 昭和三年
- 九、夢殿、第十冊、塔婆之研究 昭和八年
- 十、釋宗演、錫器島史 明治二十三年
- 十一、平林友嗣譯註、マハーランサ 昭和十五年
- 十二、伊東忠太、建築文獻、東洋建築の研究、下 昭和十三年
- 十三、天沼俊一、印度旅行記 昭和六年
- 十四、尾高鮮之助、印度日記 昭和十四年
- 十五、美術研究所編、印度及び南部アジア美術資料 昭和十四年

1. E. B. Havel, Ancient and Medieval Architecture of India: A study of Indo-Aryan Civilization, London 1915.
2. J. Fergusson, History of Indian and Eastern Architecture, Vol. 1. London, 1910.
3. J. Marshall, A Guide to Sanchi, Calcutta, 1918.
4. J. Marshall, A Guide to Taxila, Delhi, 1936, Third Edition.
5. A. Grünwedel, Buddhist Art in India, translated by Agnes C. Gibson, Revised and enlarged by Jas. Burgess. London, 1901.
6. Revealing India's Past, A Co-operative Record of Archaeological Conservation and Exploration in India and Beyond, Edited by sir John Cumming. London, 1939.
7. A. Foucher, The Beginnings of Buddhist Art and Other Essays in Indian and Central-Asian Archaeology. Revised by the Author and Translated by L. A. Thomas and F. W. Thomas. London and Paris, 1917.
8. G. E. Mitton, The Lost Cities of Ceylon, London, 1916,
9. J. Ph. Vogel, Buddhist Art in India, Ceylon, and Java, Translated from the Dutch by A. J. Barnouw, Oxford 1936.
10. Ernst Diez, Die Kunst Indiens, (Handbuch der Kunswissenschaft.)
11. Henry W. Cave, The Book of Ceylon, London, 1908.
12. The Cambridge History of India, Volume I, Ancient India, edited by E. J. Rapson. Cambridge, 1922.
13. V. A. Smith, The Early History of India, the Third Edition, Revised and Enlarged, Oxford, 1914.
14. H. G. Rawlinson, A Concise History of the Indian People. Oxford, 1938.
15. The Mahawansse, from London ed. with Japanese tr. Tokio, 1903.

附 記

本稿には五、健馱邏の塔婆をも加へ、ベシヤワル及びタキシラの諸塔をはじめ、パンジャブ地方のマニキヤーラ塔、ハイダラバードのダウラー・トプール塔、さてはカイバル峠のシャポラ塔等に論及し、更に印度古刹スツーパとガンダーラ、スツーパとの關係やガンダーラ、スツーパと極東諸國の塔婆との關係をも究める筈であつたが餘り長くなるので今回は割愛することにした。

尙ほ本稿に挿入せる十五葉の寫眞の中、第一五

圖(アマラヴァティ大塔基部の浮彫小スツーパ)はデイエツ著「印度の藝術」に載せられたもの、又第一二圖(ルワンウェリ大塔の現状)は昭和十三年頃撮影の寫眞繪葉書よりとつた。而してその他の十三葉は全部昭和七年に尾高鮮之助氏の撮影せられしものであつて、文部省美術研究所の設可を得「印度及び南アジアの美術資料」中より轉載した。

この點に關し種々便宜を與へられし同研究所の菅沼貞三氏及び守中裕幸氏に對し深甚なる謝意を表す。